第六章　補　論

本章の問題は本文に述べたる如く流通經濟論に於いて詳論するを要するものなり。故に今補論せず。

9. VIII. 24

第四編　生産の働因（供給論）

土地・勞働・資本及企業

第一章　緒　論

第三編に於て需要論の問題として欲望及其充足を論じて從來經濟學に於て『消費論』と稱するものに該當する研究を終りたり。されば之に續て供給論を試む可き筈なり。マーシアルは第一・二版に於ては第四編を名けて『供給論卽ち生産論』となし、第一章緒論に於て供給に關する總論を載せたり。然るに第五版以降に於ては第四編は、『生産働因卽土地勞働資本及組織』と改題し、第一章に於ける研究總論の順序を變更せり。是予が前編首章に於て指摘したる如く、マ氏が年所を經るに從ひ說を改めて、反つて通說の四分法（生産交換分配消費）に跡戾ししたるものにして、予が氏の爲に惜みて措かざる所なり。遞英第二章より第十三章に至る其内容に就て之を見る時は、氏の變化は寧ろ言辭

の上にのみ止まるものにして、實質に於ては、多くの異動あるを見ず。即ち第一版に於ても、『供給論』なる表題を掲げながら、其專ら考究する所は『生産論』なると、第五版以下に於けるとも毫も異る所なし。而して、從來經濟學に於て『生産論』と稱せらるゝものは、其實生産要素又は生産働因論にして、生産其ものに就ての議論は甚だ尠く、生産の要素と認めらるゝ、土地、勞働、資本に關する研究其要部を占め、而して其研究は、此等要素の增減を以て中心の問題と爲せり。故に適切に之を云ふときは、生産論と稱するよりも『生産要素增減論』と稱す可きものなり。即ち土地を論じては、主として其面積の增減の餘地殆んど之なきを云ひ、經濟上に於ける土地の增減とは、主として其性質上の增減を云ふものにして、專ら土地の豐否の問題を研究す可しと爲し、茲に收穫遞減の法則なるものありて、此問題を解答するに最も重要なりとし、之と關連して收穫增減の法則及び收穫不變の法則を論ずるなり。勞働に關しては　一數量上の增減と　二性質上の增減ありとし、一に就ては、マルサスの人口の法則なるものを主要の問題として論究し、二に就ては如斯著名なる學說なきが故に、一二實際見聞に基く常識論を以て之に答ふ。資本に就ては、再び專ら其數量上の增減を問題とし、資本は如何にして成立し、又如何にして增殖するやの題目に力を罩め、貯蓄を以て資本增殖及發生の主要因なりとして、其問題を考究す。斯くして生産論の議論完結するものと見做さる。而して通編未だ嘗て生産其ものに就て何等の法則、何等の學理あるを見ず。生産論の名に重きを置きて、之を學ばんと欲するものは、必ず失望せざる能はざるなり。而して如斯きは獨り正統學派の學者のみならず、獨逸の新學派たる歷史學派亦皆然らざるはなし。經濟學四分法を排斥する新派の學者も、事實に於ては、また全く此の舊套を襲ふのみ。予輩不平なき能はず。今轉じてマーシアルを見るに、第四編生産働因論十三章の論ずる所、又多く此亞流たるを免れず。即ち氏は本編に表題して、『土地勞働資本及組織』と云ふ。唯氏は此全體を名くるに『生産論』なる稱を以てせず、『生産働因論』なる稱を以てす。是れ內容を正直に標榜するものにして、從來の名實に過ぐるの謗を避くるを得るものなり。而も氏が生産働因論も、亦其內容に於いて生産働因增減論其大部分を占むるは惜む可しと雖も、氏が第四因として附け加へたる『組織』即ち企業に關する研究に至ては、獨り狹き增減論の範疇に限局せず、企業の性質

種類活動に付て、廣汎該博の研究を試みたるは、甚だ喜ぶ可き所なり。

今第一章に於けるマーシアルの所論を紹介するに先ち、生産なる概念と、所謂生産要素なる概念の成立に就て、大要を叙するの必要あり。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

生産及び之と關連して分配なる語の英國經濟學に於て用られたるは、千八百二十一年以後の事なり。經濟學の父と稱せらるゝアダム・スミスは未だ此の分類法を採らず。スミスに先つ九年に公にせられたるスチユアートの經濟學原論 Steuart, Principles of political economy にも亦此說を用ゐあらず。スチユアートの書は

一人口及農業　二貿易及工業　三貨幣及鑄貨　四信用及負債　五租稅及其適用

の五篇に分てり。アダム・スミスは人の知る如く、其書を五篇に分つて、

一生産力の增加及生産物分配の順序。二元資（資本財産）の性質蓄積使用。三各國富力進步の差違。四經濟政策の諸派。五國家の收入。

と爲せり。生産的生産力生産物の語は『分配さる』なる働詞と共に屢々彼れの用ゆる所なれども、術語の名詞として『生産』なる語は何處にも見當らず。然るに千八百十一年に出版せられたるボアローの經濟書 Boileau, Introduction to the study of political economy, or elementary view of the manner in which the wealth of nations is *produced, increased, distributed,* and *consumed* は働詞として明かに、生産分配消費の三項を書名に題したり。其書の分類は左の如し。

一諸國民の富の性質及淵源。二其の增加。三其の分配。四其の消費

卽ち生産なる語は『增加』なる語を以て換へられあり。此に後るゝ六年、卽ち千八百十七年に出でたるリカルドの原論は此點に於ては全く何等の系統なく、秩序なき者にして

一價値。二地代。三自然價市場價。四勞働。五利潤。六外國貿易。七地代。八地租。九家屋稅。

等の如く得るに任せて章を設けたるものなり。千八百二十年出版のマルサスの原論は、

一富及生産的勞働の定義。二價値の性質及秤量。三地代。四勞銀。五資本の利潤。六富と價値との區別。七富の增進の原因。

の七篇を設くるのみ。卽ちボアローを除きては、四分法は勿論生産論なる特別の部門を

設けたるものすらなきなり。而してボアローは獨逸學者ヤコブの書 Grundsätze der National-Oekonomie Halle 1805. に據るこゝを言明し、ヤコブは佛國の學者ジアン・バチスト・セーを祖述する旨を告白し居れり。故にキアナンが其『英國經濟學に於る生産及分配の諸理論』に於て、恰かもボアローが、三分法の創説者たるかの如く述べ居れるは、考證未だ到らざるものゝ云はざる可からず、三分法の創始者はボアローにあらずセーなり。本書舊版はキアナンの説に同じたりしも、今は其誤なるを認め之を訂正し置くものなり。

千八百十四年刊行のジアン・バチスト・セーの經濟原論第二版 J. B. Say, Traité d'économie politique は篇を分つ三左の如し。

I. De la Production des richesses.　富の生産
II. De la Distribution des richesses.　富の分配
III. De la Consommation des richesses.　富の消費

交換論を認めざるこゝボアローに同じ。而して右は其書第二版の分類にして、千八百三年に出版せる其第一版は其篇次を斯く形式の上に顯はして三分しあらず、是れキアナン誤解の因て起る所なり。然れども、内容は明かに三分法を執りあり、獨逸のヤコブ之れに倣ひ、更らに英國のボアロー此のヤコブに倣ひたるなり。（國民經濟雜誌四十二年八月第七卷第二號の拙文は此意味に於て訂正を要す。）

然るに千八百二十一年に至りて、明かに四分法を取り、生産論を以て其一部門と爲せる書出でたり。ジョン・スチュアート・ミルの父ジェームス・ミルの經濟要論 James Mill, Elements of political economy 是なり。此書四章より成る。即ち

I. Production　生産
II. Distribution　分配
III. Interchange　交換
IV. Consumption　消費

是なり。三の交換の名稱後世 Exchange と改められたるのみにして、其他は此分類法と其名稱は全然斯學の定説となりて今日に及べり。

斯く生産論を獨立の一部門と爲したるはジェームス・ミルなりと雖も、其要論の第一版

にては、What are the laws which regulate the production of commodities『貨物の生産を支配する法則如何』と題する一章は僅かに四頁に止れり。第二版に至りては聊か紙數を增加し稍々詳論を下したり。之に反し生産論に多くの力を傾注したるはトレンスの『富の生産に就ての考』Torrens, Essay on the production of wealth 1821 にして全篇四百三十頁を擧げて生産論を試む。而して彼を承けて、生産論を獨立の問題として大成せるは、シーニオア及ジョン・スチュアート・ミルなり。

生産の要素なる概念も亦右の變遷に伴へり。其濫觴は亦たアダム・スミスにあり。スミスは曰く、社會の收入に三種あり、Wages of labour（勞働の賃銀）profits of stock（元資・資本の利潤）rent of land（土地の地代）是なりと。彼は之を分配に預る點より論じたる者にして、生産の要素又は働因として論じたるにあらざれども、生産論に於て二・三又は四要素を論ずるは、事實に於て分配論に於る地代・賃銀・利子・利潤を『アンチシペート』（豫定）するが爲に外ならず。此點學者の注意するもの多からざるは惜む可し。生産要素の概念の成立は分配論に始りて後に生産論に移り及ぼせるものなることは、最近の生産要素論を諒解にも亦た其本質を究むるにも共に忘る可からざる所なり。

而して、生産三要素の語を術語として確定したるは復たジアン・バチスト・セーなり。曰く

> L'industrie, les capitaux et les agents naturels concourent, chacun en ce qui les concerne, à la production; nous avons vu que ces trois éléments de la production sont indispensables pour qu'ily ait des produits crées. J. B. Say, Traité. 2. E. 1814. vol. I. p. 85.
>
> 勞働・資本及天然各其分を盡して生産の爲めに共働す、生産物あり得る爲めには、此生産の三要素は不可缺ものなり

ボアローも亦土地・勞働・資本の共同作用云々を論ぜり。然るにジエームス・ミルは勞働と資本の二要素を認むるのみ。子なるジョン・スチュアート・ミルも二要素のみを認むるも、其は勞働と土地にして、資本は第二次的要件なりと說く。シーニオア亦然り。之に反しトレンスは三要件を認む。曰く

> The land which supplies the primary materials of wealth, the labour by which these materials

are appropriated, prepared, augmented, or transferred, and the capital that aids these several operations, are all instruments of production. —Torrens, Production of Wealth. p. 66.

富の原始材料を供する土地、此材料を占有し準備し、増大し又は移轉する勞働、此等の種々の作業を助くる資本、此等皆生産の要件なり。

然るにトレンスに遙かに遲れて（千八百四十八年）出でたるミルの原論は二要素のみを認むること前云へる如し。三要素論の定說と成れるは極めて新らしきことなること以て知る可し。而して其後に於ても資本を要素中に算入せざるもの間々あり。

最近時に至りては、生産要素を改めて經濟生活若くは經濟組織の要素を爲すこと稍々流行す。シュモラーは土地人民及技術の三を以て國民經濟の三要素 Elemente der Volkswirtschaft なりとし、セリグマン其の流を汲みて天然の包圍と人口とを以て經濟生活の基礎 Foundations of economic life なりと說けり。

經濟行爲中心論より云へば生産又は分配の要件たるもの經濟組織中心論より見れば、全體の組織又は生活の要素と成るは理の當然なり。別に新案にあらず又た創說にもあらず。却て附會の跡を掩ひ難く、感服し兼ぬる點尠からず。猶ほ斯學向後の發達を待つ可きものなり。

* * * * * * *

以上生産及生産要素の概念の沿革を略叙し終りたれば、進んで第一章に於けるマーシアルの所論を窺ふ可し。

氏の緒論は二部に分つを得。一は生産要素總論にして、二は供給總論なり。先其一より始めん。マ氏は生産三働因（要素と云ひ、要件と云ひ、働因と云ふ語は異れど、意は概ね同じ。要素は element 要件は requisite 又は instrument 働因は agent（獨語には Faktor と云ふ者多し）の譯なり。但其中 element と agent (Faktor) とは多少意味に差あり。要素は構成部分と云ふ程の義、働因は働作原因又は發動力源と云ふ程の義なり。プレンタノ先生は生産の働因は唯一勞働即ち人間のみなりと云ふ。其意は人ありて始めて生産あり人なくんば生産なしと云ふにて、發動力源と云ふことに重きを置きての論なり。然れども通例斯迄重き意味を此語に附するもの殆んど無しと云ふ可きか。）は通例土地勞働資本より成ると見做さると云ひて、此三者に定義を下せり。

曰く

一　土地とは水・陸・空氣・光線・熱の態に於て天然が自由に人間を助くる爲めに與ふる材料

及力を云ふ。

By Land is meant the material and the forces which Nature gives freely for man's aid, in land, and water, in air and light and heat.

二　勞働とは手又は頭を以てする人の經濟上の働を云ふ。

By Labour is meant the economic work of man, whether with the hand or the head.

三　資本とは物質財の生産及通例所得の一部を成すと認めらるゝ便益を得る爲めの凡ての蓄積せられたる準備資料を云ふ。

By Capital is meant all stored-up provision for the production of material goods, and for the attainment of those benefits which are commonly reckoned as part of income.

（以上の定義中はこを執らざるべからず既に前編に細論せる所なり就て看る可し）

而して氏はこに加ふるに更に第四の働因として組織（企業）を以てす可しと云ふ。曰く

Capital consists in a great part of knowledge and organization: and of this some part is private property and other part is not. Knowledge is our most powerful engine of production; it enables us to subdue Nature and force her to satisfy our wants. Organization aids knowledge; it has many forms, e. g. that of a single business, that of various businesses in the same trade, that of various trades relatively to one another, that of the state providing security for all and help for many. The distinction between the public and private property in knowledge and organization is of great and growing importance: in some respects of more importance than that between public and private property in material things; and partly for that reason it seems best sometimes to reckon organization as a distinct agent of production.

資本は大部分知識及組織より成る。其中私有財産たるあり、然らざるあり。知識は生産の最有力機關なり。吾人はこに依りて天然を從へこれを强制して吾人の欲望を滿足せしむ。組織は知識を助く。組織に種々の形態あり。例へば單獨營業同業中の異れる諸營業、異れる業相互の關係、國家の經營等是也。知識及組織に於ける私有と公有との區別は大に肝要にして其肝要の度亦增しつゝあり。或點に於ては有形物に對する公有・私有の別よりも肝要なり。而して一部分此理由よりして、或時には組織を一の獨立なる生産働因と認むるを最も可と認めしむるものあり

こゝ。即ち氏は公有私有の點を主として、組織を生産の一働因と認めんとするなり。

氏は斯く生産の四要因を認むれども、又た或意味に於ては、生産の働因は天然と人との二あるのみと云ふ可しとて、ミルの舊說を承繼す。而して二者の中又人こそ最中心たる可しとて、ブレンタノ先生と粗々同說を唱ふ。曰く、資本も組織も共に人間の働（天然の助を藉ること勿論なり）の結果にして、人が將來を豫測する力及之に向て具ふる用意によりて左右せらる。而して人其ものは亦包圍の天然によりて形造らるゝものなり。故に何れの點より見るも、生産及消費の中心たるものは人間其ものにして、生産消費の關係より生ずる問題たる交換及分配の研究も亦人を中心とせざる能はずと。

人間は經濟學研究の最終目的にして、其數・健康・體力・知識・技能・性格の富に於ける進歩は其最高の問題なり。故に經濟學に於て此等問題を論ずるは最終篇に於て爲す可きや當然なり。近來獨逸の學者中人口論を經濟原論の最終に置くもの往々之あり。最も著しき例は、ロツシアーなり。フツクス亦之に倣ふ　マ氏曰く、此意に於て、人口の問題に就ては、經濟學は其全部を盡し得るものに非ず、又之を論ずるも、最終部に置く可きものなり。然れども生産論を爲すには必ず人口の問題を度外に置くを得ず、故に通說に從ひ生産の點より見たる人口論を生産論中に置くは便宜の問題に外ならず。然り原則の問題としては、人間を取扱ふに單に生産要素の一としてのみするは甚だ當を得ず。必ず凡ての上に立つものとして、之を論究するを要す。此意味に於ては、シュモラーの如く、經濟學の首部に經濟心理・倫理論を置きて、先づ凡ての經濟現象の唯一働源としての人間を研究するを以て當を得たりとす。又消費論を始めに置き、其處に於て人間論を詳悉するも可なり。唯通說の人口論は主として、數の增減に關するものにして、勞働力の供給てふ觀察點より論を立つるものなれば、其意味に於ける人口論は當然生産論に入る可きものなり。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

以上を以て本章に於けるマ氏論點の第一を終れり。第二の論點は供給に關する總論なり。其大要左の如し。

マ氏は先づ需要と供給との關係を論ず。曰く需要と供給卽ち消費と生産との關係を詳論するは今其所にあらず、却て或は誤解を惹起する虞なきにしもあらず。然れども價格と利用との關係を前章に論じたるに引續て、價格と非利用との關係を詳論するは必ず

しも無益の業に非ず。非利用（Disutility）とは欲望の對象たる財を得んが爲め打克たざる可からざる困難を云ふ。此は後編に至つて更らに詳論を要するものにして、吾人の茲に論ずるは單に其一端に過ぎず。

需要は財を得んとの念に基くものなること前に述べたるが如し。今此と對向する供給は、之を得るに要する困難 discommodities を忍ぶを欲せざる念慮によりて制せらる。此困難は分つて二とす。即ち一勞働　二即時の消費を繰延ぶる犧牲是なり。勞働には企業の勞務含まれあり。（此點予は服せず、後段を見よ。）犧牲には生産要具の蓄積に要する忍耐含まれありと雖も、其は今茲に論ぜず。單に普通の勞働に就て見るに、勞働が困難 discommodity と感ぜらるゝは、其が肉體及精神上の疲勞を伴ひ、又は健康を害する狀態の下に於て好ましからざる朋輩と共にし、又は娛樂其他の要務に費すを得可き時間を犧牲とするを要するより起る。困難の形態は斯く千差萬別なれども、其度合は勞働の激しさ及時間の長さの增すに從ひ增すを以て通例とす。但し之等の疲勞は他の爲めの手段としてにあらずして、單に其自らの爲めに之を敢てすることあり。例へば山に登り遊戯に耽り、其他文學技藝學問に從事するが如き皆然り。又他人を利せんが爲め困難なる勞務に服することあり。然れども大多數の場合に於ける勞務は、之によりて物質的利益を自己の爲めに得んとする動機によりて營まるゝものなり。而して此物質的利益は現在の經濟生活に於ては、一定の貨幣額となりて顯はるゝものなること、既に屢々說けるが如し。元より他人に雇れて勞働する時と雖も、其仕事自らに興味を覺え、之れより愉快を得ることなきにあらず。然れども他人の爲めにし又或る他の目的を達す可き手段として營むてふ事實は、原則として苦痛を伴ふものにして、休息の時間の來るを樂み待つは、凡ての人の情なり。職なく業なき時は却て退屈を感じ假令報酬を得ざるも猶且働かんと欲することなきにあらずと雖も、而も需要せられざる勞働を提供して市場を亂さんより、寧ろ其供給を差控ゆること、商人が需要少き場合には、其商品の賣出を見合すと事情殆んど同一なる可し（此點は後編に至り更らに詳論す可し）。今此の供給限界の點を名けて、勞働の『限界非利用』Marginal disutility と稱するを得可し。

既に或職業に從事する者が更らに其力作を增すを欲するや否やを定むる事情は、人間

心理の上に一定の根據を有するものにして、經濟學に於ては、之を既定の事實として認むるものなり、此點に就ては、ジェヴオンスは稍々緻密の論究を試みて其原論の第五章『勞働の理論』に掲げたり。曰く、凡そ事を始むるに方りては、之に取掛かると云ふこと既に多少の困難を感ぜしむ、愈々事を始むるにも亦多少の抵抗と戰ざる可からず、事漸く進むに及び此抵抗と困難とは漸次減少し、終には零無となり、愉快反つて之に伴ふ。此愉快は遞次に增進して、一定の最高限に達するときは、再び減少し始め、終には零無に歸し、茲に再び困難を生じ、此困難は亦遞增す。但し精神上の勞務に在りては、業進むに從ひ愉快增進するの一方あるのみにて、必要又は思慮によりて之を止むるにあらざれば、多々益々進みて停まらざることなきにあらず。

蓋し人の心身の力には一定の限度ありて、無限に之を充用するを得ず。力の支出が其收入（休息睡眠等による力の回復）に超過するときは、力源の破壞を來す。勞働者に增賃して時間以外に働かしむることを或度以上に及べば、却て生産力の損減を來すことは確定の眞理なり。（此點は後段詳述す可し猶勞働經濟論及國民經濟講話勞働の部を併せ見よ）蓋し人勞役すること愈々多ければ、休息の必要亦愈大となる。一定限以外の過勞は、仕事の增量よりも大なる比例に於て疲勞を惹起す。是れを『疲勞遞增の法則』と名く。

右の事情は之を後章に叙述するに讓りて、大體の原則に就て見るときは、ジェヴオンスの說きたる所克く要を得たり。曰く、勞働者の力作は之に供する報酬の大小に從て、增減すること、貨物の供給が提供せらるゝ價の多寡に伴て增減すると其理異ることなし。一定の貨物に對し買手を誘致する價を名けて『需要價格』と稱せし如く、一貨物の一定量を生産するに要する力作を招致する價は、之を名けて『供給價格』Supply price と云ふを得可し。

And if for the moment we assumed that production depended solely upon the exertions of a certain number of workers, already in existence and trained for their work, we should get a list of supply prices corresponding to the list of demand prices which we have already considered. This list would set forth theoretically in one column of figures various amounts of exertion and therefore of production; and in a parallel column the prices which must be paid to induce the available workers to

put forth these amounts of exertion.

今生産が全く既存成熟の勞働者の一定數のみによりて營まるゝものと推定するときは、既に前編に說きたる需要價格定表に相應する、供給價格表なるものを作るを得可し。此、表は、一方に於ては、力作の數種異れる量卽ち生産額の異れる各種を揭げ、之と相對して、此等の量及額を招致するに要する價格を揭ぐる一の理論的定表なり。

と。而して氏は此種定表は之を實際生活に適用するには、種々の困難ある可きを豫想せり。卽ち斯く定表を作るには一定の貨物の生産に從事する勞働者の數一定不動のものと推定するものなれども、實際に於ては、斯くの如き事は到底あり得可からず。極めて短かき時間に就てのみ稍々望み得可きのみ。人口の數は絕えず增減し、從て勞働者の數變動す。元より勞働に對する供給價格たる賃銀の多少は、此變動を左右する有力の一原因たるや疑なしと雖も、此他にも種々の原因ありて、其作用は不規則的なるを常とす。故に賃銀の增減のみを以て勞働供給の增減を律せんは、實際の事實に遠かるの眞あり。

遮莫種々の職業間に於ける人口の分配は、主として經濟上の原因によりて定めらるゝものなることは原則として之を認めざる可からず。卽ち長き時期に涉りて觀るときは、一職業に於ける勞働の供給は大體に於て之に對する需要に伴ふものにして、親が其子を敎育するに方り、常に需要の多き業の準備を與ふるを勉むるは、畢竟此れが爲めなり。乍去勞働の供給と需要の調和は決して絕對完全に行はるゝものにあらず。之を妨ぐる事情は其數多く、又絕えず起り來るものにして、其研究は後編を待たざる可からず。本編は主として、記述的方面に限り、此等の複雜なる問題を交へざるを主眼とすと。以上マ氏の說く供給總論には、予輩の眼し難き點一二にして止まらず。

一　供給の考察を單に生産に要する力作卽ち勞働の供給のみに限ること

二　從て供給額を勞働の供給額と殆んど同意義なるが如く說くこと

三　單に需要供給調和の點のみを論じ、抑も供給の本質の何たるやに論及せざること

等は、殊に缺點と見る可し。而して本章に於てマ氏の說く所は、單に問題の一端に過ぎずして、後に至り皆夫々詳論を要するものなり。卽ち氏は、本章元來の問題は之を閑却し、問題外なる準備論を以て之を補ふこと、議論の順序を紊るの嫌ありと云はざる可からず。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

生産の唯一最高の働源は人間なること云ふ迄もなし。從て供給の問題も亦人を以て其中心と爲す可きは勿論なりと雖も、消費に對する生産需要に對する供給は、寧ろ物の側に多くの問題を有し、供給論中勞働の供給は、却て他の生産要素の供給と異る特殊の點を有すること多し。故に勞働供給論を以て、供給論の全體を推論し得可しとするは謬れり。予の見る所にては、供給論は、寧ろ物の供給の問題を主として論じ、其の外別に趣を異にするものとして、人の供給即ち勞働の供給を研究す可きものなり。マ氏が勞働供給論を供給論全體の中心に置くは、全くジェヴオンスの舊衣を襲踏するものなり。ジェヴオンスは『愉快と苦痛』の均衡を以て、經濟學の鎖鑰とするものなるが故、斯くすること多少の理由なきに非ざれども、マ氏の如く汎く一般に渉りて、供給論を試みんとするものに在りては、此の論法は、全然不適當なり。蓋し需要に於いては主觀的要素主として働き、供給に於いては客觀的要素專ら顯はる。經濟現象は人と物との相互作用に成る。人は需要の負擔者、欲望の體現、消費の主體として活動し、物は供給の代表者、欲望充足の對象、生産の實現として之に呼應す。斯くてあらゆる經濟現象は、各其宗とする所を得、其研究に一定の秩序あり、體系あり、組織あるを得るなり。

元より供給も亦人の營む所にして、其働源は人の意志の中に存するや論を須たず。一定の供給を誘致する原因は、先づ心理的作用を有するものなり。然れども其の心理的作用は、勞働誘致の作用にあらず、否勞働の誘致者は寧ろ充されんとする欲望なり、應ぜられんとする需要なり。賃銀が人をして力作を肯ぜしむるは、得たる賃銀が何等かの既存又は將來の欲望を充し、消費を營ましむるを得ればなり。賃銀は人より觀れば目的にあらず、手段のみ。供給を誘致する心理的作用は勞働力作の働源たる上に存せず。然らば何に存するや。答へて曰く、企業の働源たる上に存す。人が供給の働因たりと云ふことは、生産を創め、之を擧り、之を完成する企業行動の誘致者としてのみ意味を有す。營利的資本制組織に於ては、此理甚だ顯著にして詳說を要せざれども、自足經濟組織に於ては、稍々明瞭ならざるの感あり。マ氏は即ち此の點に於て誤謬に陷れるなり。自足經濟に於て、物の生産と云ふときは、直ちに其生産者に於て勞務力作を意味す。マ氏は之を目して勞

F. I, 35.

働と爲せるなり。是れ謬なり。假令自ら勞務力作に從事するも、供給の働因としては此勞務力作其物が問題たるにあらず、此勞務力作を創意し立案し計劃し實現し完結することが問題となるなり。此等の事業は勞働者として爲すにあらず、企業者として之を爲すものなり。即ち此場合には勞働と企業とは同一人の手に結合せらるゝものなり。現時の經濟生活に於ては此二者は明かに分界せられあり。而して供給の働源は企業者としての人にして、勞働者としての人にあらざることは、斯學の定理敢て茲に冗論の要なし。マ氏所論の不透徹到底辯護の餘地なし。

故に曰く、供給論は終始一貫企業の立場よりす可きものなり、勞働供給增減の眼點より立論す可きものにあらず。勞働は土地資本と共に企業の手に於て結合せられ其指導經營の下に、生産の部分的職分を盡すのみ。マ氏の如くするときは、終に全く勞働生産唯一要件論の謬見に陷るの危險あり。生産の立場より見れば、勞働は種々の要件中の一のみ、供給其物の負擔者にあらず、又代表者にもあらず（勞働其物の供給より云へば、勞働者も亦一の企業者なるとは、マルクスの論ずる所不可動眞理なり）。猶本編論歩を進むるに從ひ此理明瞭なるを得ん。

第一章　補　論

生産生産要素の語の沿革に就ては

Cannan, Theories of production and distribution.（前に詳掲せり）を讀む可し。

企業が供給の働源なることに就ては

Sombart, Der moderne Kapitalismus. Bd. I. 3. A. München u. Leipzig. 1919.

坂西由藏　企業論

福田德三　經濟學研究　二四一頁以下を見よ。

ジェヴォンスの說は Theory. 4. E. 1911. 一七〇頁以下にあり。就中一八三頁至一八九頁を精讀す可し。

マルクスの說（勞働の供給卽ち賣手としては勞働者も亦企業者なり）は

Das Kapital. I. 4. A. 1890.

の第四百九十七頁以下に在り。

生産論のことは何れの原論の書にも之れを論ぜざるはなし。特に生産のことを取扱ひたる書は第二編第三章補論にあげたる以外の重なるもの左の如し。

Hasbach, Güterverzehrung und Güterhervorbringung.

v. Wiese, Die Lehre von der Produktion und Produktivität. (Entwickelung der deutschen Volkswirtschaftslehre im 19. Jhdt. Teil I. III. 1908.

其他最近刊のヂールの原論第二卷（原名前に出づ）ペッシュ原論第四卷（原名前に出づ）三〇三頁以下を見る可し。

第二章　生産要素としての土地の特質（不變性）

生産要素を二なりとする學者も、三なりとする學者も、將た亦た四なりとする學者も、其一として必ず土地を算入せざるものなし。げに土地と勞働とは殆んど總ての學者が生産の第一次要素と認むる所なり。然るに『土地』なる語の內容如何の問題に就ては必ずしも定說あるにあらず。殊に『資本』と分別して『土地』なる語を用ゆるに方り、兩者の分界を何れに定む可きやは、學者間に論爭の絕へざる所にして、最近の說に於ては、土地と資本とを區別するの必要を疑ふもの少からず。曰く、土地も亦一の資本なり、不動産てふ一の財産なり、事業經營の立場より見れば、投下せられたる資本は、其が土地なると、建物なると、機械なると、原料品なるとに於て、何等の差違を有するものにあらず。此等皆一樣に一定の貨幣價値に見積られ、たる生産要具なり、其中獨り土地のみを離隔し、之を特殊

なる生産要素として取扱ふこと其意を得ず。唯土地は自由に所在を轉換し得可からざる不動産なることのみを特異の點とす、其他に生産要素として土地のみに特色とす可き所を見ずと。予も亦多くの點に於て此說に贊同するものなり。而も猶土地を資本と分別して之を一の獨立なる生産要素と認めんとする舊來の通說も亦存在の理由を有することを否む可からずと信ず。唯通說が土地の特質なりとする所説に於て服し能はず。通說が土地に固有なりと認むる特質は

土地の　一豐度　二地位は

一　自然的要件にして人間の力によらず

二　不可壞性を有す

と云ふ點にあり。此說はリカルドの說を祖述するに外ならず。リカルドは地代を論じて曰く

Rent is that portion of the produce of the earth which is paid to the landlord for the use of the original and indestructible powers of the soil.

*　*　*　*　*　*　*

……for it is found, that the laws which regulate the progress of rent, are widely different from those which regulate the progress of profits, and seldom operate in the same direction.

In the future pages of this work, then, whenever I speak of the rent of land, I wish to be understood as speaking of that compensation, which is paid to the owner of land for the use of its original and indestructible powers. Principles. Works. p. 35.

地代とは土地の本來固有にして不可壞的なる力の使用に對して其所有者に支拂はるゝ土地の生産物の部分を云ふ

地代の進歩を支配する法則は利潤の進歩を支配する法則とは甚だ異るものにして同一の方向に働くこと稀なり

故に予は此書に於て土地地代を云ふときは其固有不可壞の力の使用に對して地主に支拂はるゝ報酬のみを意味するに限らんとす云々

と。即ちリカルドは土地の分配に於ける特質は

一　本來固有的　original

二　不可壞的　indestructible

の二に存するものと爲す。然るに後の學者は分配論を移して生産論と爲すこと前章既に說く如くなれば、リカルドが斯く分配論に於て論じたる土地の特質を直ちに生産論に應用し、土地の特色は　一本來固有の力にあり、人間勞働の結果にあらず　二不可壞不可變又增減し得可からざること、他の凡ての生産物と撰を異にすと說きて、之を一人間勞働の結果として初めて發生し　二可變可壞、人力を以て增減し得る資本と區別せんとするなり。然れども、分配論に於て、リカルドの說の到底維持し難きが如く（後段詳述する所を見よ。）生産論に於ても之を祖述する通說は、應用の道を謬れるものと云はざる可からず。

土地の本來固有の力とは何ぞや。農業に用ゐるも住地として用ゐるも、現在存在する土地は皆人力の賜に待つこと著しきものなり。開墾耕作灌漑疏水は勿論肥料を施して地質を改良し、其缺點を補ひてこそ、土地は收穫を供するなれ。天然其儘にして使用せらるゝ土地なるもの、殆んど之あるを見ず。他方に於ては、疑もなく人力の結果として認めらるゝ生産物にして、人力を藉ること甚少きものあり。マ氏の引例せる煉瓦の如きは、土

に加工すること僅かにして成るものにして、之に比すれば、菜圃の如きは、遙かに多くの人力を注ぎたるものなり。故に本來固有の力云々と云ふこと、到底實際生活の事實と相應せず。市街住地の價高きは、其本來固有の力に待つこと甚だ僅かにして、大部分は人文の發達交通の進歩の結果なり。故にセリグマン曰く

Without the dykes of Holland and the irrigation works of arid America the land would be worthless. In some garden plots on the European continent the tenant on leaving is permitted to take with him several inches of soil,—the value of the land is as much or as little a product of labor as in the case of other things. It may be contended, however, that the value of urban land at least is not a product of labor. But how about the value of a newspaper, or a banking business? As the country town becomes a prosperous city, the newspaper, like the corner plot, becomes more valuable, even though the editor works no harder than before.—Principles (1907) p. 300.

和蘭の堤防、米國の疏水設備皆之ありて始めて土地の價を生ぜしむるものにあらずや。歐洲大陸の或菜圃に於ては、借地人は其土地を返還するに方りて、上層數吋の土壤を持去るを許さる。土地の價は他の貨物と同じく勞働の結果なること、是を以て知る可し。人

或は云はん、市街の住地の價値は少くとも人力の結果にあらずと。然れども新聞紙又は銀行業も其土地の繁昌に從ひ、其價値を增すこと角の地面と毫も異るなきを思へ云々と。

土地の不可壞力に就ても亦同じ。セリグマン曰く

It is a commonplace that the chemical ingredients of the soil need to be constantly renewed. The best agricultural land may become the worst, and the worst, the best, after a few generations of exploitation or thrift, as the case may be. p. 301.

土地の化學的性分は絶へず更新を要するものなるは人の普く知る所なり。數代に亘りて或は土地を濫耕し或は其利用に方り節約を守るによりて、最豐の地も最貧地となり、最貧地却つて最豐地となることあるものなり

と。之を資本と比較して、土地の方より不可壞的なりと云ふ能はず。又社會的事情の變遷如何によりて經濟上に於ける土地の價値は容易に破壞せられ得可きものなり。セリグマンは此理を推して土地に不可壞的性質なるもの全く之なしと云ふ。然り　一豐度に就ても　二地位に就ても固有本來及不可壞の特性なるものは、到底之を認むるを得ず。二者共に　一人力に依りて增減せられ　二壞る可く新たに興し得可きこと、他の資本と毫も異る所なきものなり。通說が此點を以て、土地の特質とするは謬れり。

然らば土地は全然他の資本と同一種類に屬す可きものにして、土地のみに特有の性質なるものなきや如何。答へて曰く有り、大に有り。土地は他の資本と異る一大特質を具備し、從て此點より土地を經濟上に於て一の獨立なる生産要素と認めざるを得ざるものなり。其特質とは、卽ち土地は延長（Extension, Ausdehnung 又は surface, Fläche 地面と云ふ）を有するものなること是れなり。此屬性は土地に特有にして、資本に缺く所なり。土壤の物理的化學的の力は人力を以て左右し得可きこと、他の資本と毫も異ることなし、獨り延長なる特質に至つては、天然に與定せられたる不變不動の屬性にして、人は之を如何ともする能はざるものなり。此特性あればこそ、土地は生産要素として資本と相異りて、獨立の地位を占む可きなれ。而して此特質は誠にリカルドの云へる如く本來固有にして又不可壞的のものなり。セリグマンは

But surely, it will be said, the qualities of extension or location are indestructible. Even here, however, it must be observed that the two things are not identical. The mere extension of land is indeed indestructible, but it gives no value. All land is alike in extension,—the worthless and the valuable. Location is extension plus situation, just as fertility is extension plus chemical ingredients. Location gives value to land, but location is not indestructible as an economic factor. p. 301.

人必ず答へて云はん、延長又は地位なる性質は不可壞なりと。然れども此兩者同一視す可からず。土地の延長の不可壞性を有するは誠に論者の言の如し。然れども延長のみにては、價値は生ぜず。高價の土地も價値なき土地も均しく延長を有す。土地の豐度は延長と化學的成分とより成る如く、土地の地位は延長と位置とより成る。地位は土地に價値を與ふるも其は經濟的働因として決して不可壞のものにあらず

と云ひて、延長を特質とするとに重きを置かず。予を以て見る、此論謬れり。一單に價値發生の點のみより土地の特質を論ずるは、前提に於て既に誤謬なり。二豐度は化學的成分より成り、地位は延長十位置より成ること、氏の云ふが如くなれば、土地の延長は常に要因として働く特質なるを否定するは論理上許す可からず。蓋し土地の特質たる延長は、化學的成分と結合しては其豐度となり、地理的人文的の位置と結合しては其地位となるが如く、常に生産要素としての土地の作用を體現するものなり。豐度は一定の延長ありて始めて意味を爲し、地位も亦一定の延長が或位置に在ればこそ經濟的働因となるなれ。延長なくしては、土地の存在も作用も共に意味無きものとなる。一定の延長が或度の化學的成分を體現し、又は或位置にありて、茲に生産要素としての作用起る。此作用は常に延長によりて限定せられ、負擔せられ、保持せらる。是れ土地が他の生産要素と異る所なり。

資本の作用、勞働の效程は土地の豐度又は地位と均しく、人力を以て左右し得る可變的條件なり、而して猶之に加へて資本は其額を增減し、人口は其數を增減す。獨り土地に至りては、其延長は始終一定にして增す能はず、減ずる能はざる不變的要件なり。此不變的性質は資本になく勞働になし、之を土地の特質と目せずして何とか云はん。從來の通說此點を說く充分ならず、セリグマン一派は反對の極端に走りて、全然土地の不變的特質を

否定せんとす。予は其孰れにも與する能はざるものなり。セリグマンは僅かに

While the differences between land and other things that constitute capital are thus differences in degree rather than in kind, it remains none the less true that land may usefully be put into a separate category. This is due to the fact that an increased supply of other things in general involves a duplication of the thing itself, while the increased supply of land involves a difference in location or fertility. p. 302.

資本中土地と其他の物との差は、種類の差よりも寧ろ度合の差に過ぎざること以上説く如しと雖も、猶土地丈けは之を別類とする方適當なるは論なし。其故は、他物の増加は物其自らの増加なるに土地は然らず、地位又は豐度の變化を意味するに外ならざるに依ると説くのみにして、延長の確定不動なるが爲めに『物自らの増加』 duplication of the thing itself 『同種倍加』 multiplication of the kind なる現象土地に付て起らざる理を説かず。豐度及地位の變動よりのみ土地供給の増減起り得ること、セ氏説く所の如しと雖も、其然る理由は、延長なる特質存するにあるを知らざれば、此現象は其眞相を究め得べきにあらず。

マーシアルは土地の特質を以て其延長にありと爲すこと、全く予が見解に同じ。今左に第二章第一節に於ける氏が所説の梗概を叙して、之を示さん。

マ氏曰く、通説は、人力によりて其要用を得る有形物を資本と名け、然らざるものを土地と稱す。然れども此區別は精確ならず。煉瓦は土に少しく加工せるものゝみ、然るに舊文明國の土地の大部分は、人の力を藉ること甚だ多く、其の現在の形態に於ては、全く人力の結果と云ふ可きものなり。然りと雖も、土地と資本とを區別するは、學理上根據ある原則に基くものなること否定す可からず。蓋し人は物質を創造する能はず、唯之を人生に有用なる形態に變ぜしめて、利用を作り出すを得るのみ。此利用は需要の増すに從ひ、其供給を増すことを得るものにして、供給價格を有す。然るに人力を以て供給を左右し能はざる利用あり。即ち自然的に一定量に於て與へらるゝのみにして、需要に應じて増加する能はず、供給價格を有せざるものあり。經濟學に於て土地と稱するは、是等の増減し能はざる利用の不變永久の淵源を總稱するものにして、必ずしも狹義の土地のみに限らず、河海日光雨風瀑等を兼ね含むものなり。リカルドが『土地の本來固有にして壞る可

からざる力」と云ひフォン・チューネンが Der Boden an sich『土壌其もの』（孤立國家一一一ノ五）と名けたるは此を指すなり。

今土地と土地の産物たる有形物と相異る點如何と云ふに土地の根本的屬性は其延長 extension に在り。一片の土地を使用する權利は地球表面の一定部分に對する支配を與ふ。然るに地球の面積は確定不動なり。其一部と他の部分との幾何的關係亦確定せり。人は之を左右すること能はず需要の增減は之に影響することなく生産費なるもの亦なく其生産を誘致す可き供給價格あることなし。

人は何事を營むにも狹く限定せられたる地球表面の一定面積を使用せざる能はず。人はこれより其活動の所を得熱光空氣雨の其面積に與くらるゝものを享受す。他の人他の所に對する距離と關係とは亦た是によりて定めらる。マ氏即ち結論して曰く

We shall find that it is this property of "land," which, though as yet insufficient prominence has been given to it, is the ultimate cause of the distinction which all writers on economics are compelled to make between land and other things. It is the foundation of much that is most interesting and most difficult in economic science.

土地の此の特質（延長を云ふ）は從來餘り重きを置かれざりしも不知不識の間に學者が土地と他の物との間に施す可く餘儀なくせられたる區別の最終原因なるを知る可し。而して經濟學に於て最も興味あり而も最も困難なる問題の根柢茲に在り

と。誠に至言と云ふ可し。

ディヤン先生亦マ氏と相同樣の論を主張す。唯先生は土地の特質は其獨占的性質を有する點にありとし獨占的性質は、一地面 Fläche　二地位 Lage の二に於て存在すと說くこと左の如し。

Als Produktionselement trägt der Boden einen doppelten ökonomischen Charakter.

Er ist einmal ein Produktionselement monopolistischer Art; d. h. er ist nur in beschränkter Menge vorhanden. Diese Menge kann durch menschliche Thätigkeit gar nicht oder nur unerheblich vermehrt werden.

Er hat zweitens aber auch Eigenschaften, welche durch menschliche Thätigkeit produziert werden

F. I, 36.

können.

生産要素として土地は二様の性質を有す。

一　土地は獨占的生産要素なり。換言すれば土地の存する量は有限なり。此量は人の力により全く増すを得ざるか又は極めて僅かに増し得るのみ。

二　土地は人力によりて生産せられ得可き性質を有す云々

而して

Der Boden ist ein Monopol in doppelter Hinsicht—als Fläche und nach seiner Lage.

土地は二の點に於て獨占なり。一地面として　二其地位によりて是なり

と云へり。（以上 Agrarpolitik. Stuttgart. 1897. S. 5 に在り）

一の地面と云へるは予が延長と云ひゝ氏が extension と云へるものに該當して氏の說く所全く予の服從する所なり。之に反し　二の地位を以て獨占的なりとする師の所論予は從ひ難し。其說に曰く

Allein nicht jede Fläche, nicht jedes Stück Erde ist in gleichem Masse geeignet, sowohl die Nutzbarmachung der menschlichen Arbeitskraft als auch die Ausnützung der genannten freien Naturgaben zu ermöglichen. Das Mass, in dem die eine wie die andere möglich ist, hängt ab von der geographischen Lage des einzelnen Flächenstücks. S. 6.

然れども唯地面あり一片の土地ありて其は人力及所謂自由なる天然の賜を利用するに均しく適せるものにあらず其適否の度は各地面の地理的地位によりて定るものなり

而して此地位は　一氣候の關係　二經濟上の關係の二に於て土地の生産効程に重大の關係ありとし結論を下して曰く

Also: der Boden ist ein monopolistisches Produktionsinstrument, einmal insofern er als Flächenstück nur in begrenzter Menge vorhanden ist, und zweitens insofern die geographische Lage des Bodens die Zahl der vorhandenen Flächenstücke, die technisch und wirtschaftlich nutzbar gemacht werden können noch bedeutend verringert. S. 8.

即ち土地は二様の意に於て獨占的生産要具たり　一土地の面積は有限量に於てのみ存在すること　二土地の地理的地位は技術上經濟上生産用に供せられ得可き土地の數を

更に著しく減少することと是なり

と。然るに地位とはセリグマンの言ふ如く、畢竟するに延長と位置との相合して成るものにして、延長と相對立するものにあらず。豐度と同じく第二次的要件たるものにして、所謂本來固有のものにあらず、又不可壞のものにもあらず。一氣候の關係は地味の豐否と同じく土地に存するとは云へ、其利用は、人の力を以て左右し得る所なり。否人は氣候に順應して其與へられたる氣候に於て、其力を發揮することを勉む、氣候の影響を受くる人は、選擇の自由を有すること、土地面積選擇の自由を有するに均し。二經濟上の關係に至つては、全然人間的社會的產物にして、本來固有のものにあらず、又不可壞のものにあらざることセリグマンの言の如し、之を以て土地のみに特有なる性質と爲す可き理は之を知るに苦まざるを得ず。所詮獨占的なるものは延長のみ。此延長と結合するものは、皆獨占せらる。土壤の化學的成分は延長と結合して獨占せられたる豐度となり、位置は延長と結合して獨占せられたる地位となるなり。氣候は獨占するを得ず、吾人は一定の氣候を有する土地の面積を獨占し得るのみ。土壤の成分其ものが獨占性を有せざるが如く、地理的位置も亦其自らに於ては、何等の獨占性を帶ぶることなし。ブレンタノ先生が地位を獨占的なりと云へるは、延長ありて始めて獨占せらるゝものなる事實を度外に置くの嫌あり。蓋し師は通說が豐度と地位とを土地の特質なりと說くに影響せられたるものなる可し。師既に獨占的性質と云ふ以上、獨占の內容を充たすに舊說の特質を以てするの不可なるを思はざる可からず。予は此點に於て師說に背くの不得已を信ずるものなり。

第二章　補論

參考書

Brentano, Theoretische Einleitung in die Agrarpolitik. (Agrarpolitik. I. Theil). Stuttgart 1897.
SS. 3—14.

von Thünen, Der isolirte Staat in Beziehung auf Landwirtschaft und Nationalökonomie. 3. Aufl. heausgegeben von Schumacher-Zerchlin. III. Theil Berlin 1875.

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

歴史派の學者は、ブレンタノ先生を除くの外、本章論ずる問題に重きを置かず、殊にシュモラーの如きは、經濟地理的雜話を詳說し乍ら、一向此點に及ばず、予の同じ難き所なり。マ氏及ブ氏が純理を重ずる用意後進の範たる可きものなり。

唯ブレンタノ先生が、獨占的てふ意を存在量有限と同義なりとするは、聊か當を得ず。有限なるもの必ずしも獨占せられず、否經濟上にて云ふ生産要具は皆有限なり、土地のみ獨り有限なるにあらず。コーンは克く此意を明かにし、一方に於て、土地が有限なるが如く、他方に於ては勞働も亦極めて有限なることを詳論せり。曰く

Beschränkt gegeben im Vergleiche zu unserm Bedürf—ist aber nicht nur ein Stück der äusseren Natur: diese ist blos das eine Element, in welchem das Wirtschaftliche sich entfaltet. Das andere Element ruht in dem Menschen selber; es ist der, psychologisch zu würdigende, Trieb zur Thätigkeit, welcher, in den anstrengenden Dienst eines vernünftigen Zweckes gespannt, „Arbeit" heisst.

——Cohn, Grundlegung der Nationalökonomie. Stuttgart. 1885. S. 192.

吾人の欲望に比較して有限に與へらるゝものは外界天然の一片たる土地のみにあらず、此は經濟的（卽ち有限性）てふ現象の顯はるゝ一要素のみ。第二の要素は人自らにあり、卽ち心理的に測らる可き行動の衝動にして、一の合理的目的を達する爲めに發動するとき勞働と稱せらるゝもの是なり（經濟原論百九十二頁）

と。予は有限性を以て直ちに『經濟』の特色とする論を採らざること前に述べたる如くなれども、有限と云ふ以上は、土地のみ獨り然るにあらず、勞働亦然るものなる理を主張するに於て、コーンと全く同說なり。ブ師が之を以て土地の特質を言表はさんとすることの不可なる此を以ても知る可し。況んや師の云ふ意味にては、勞働力も亦勞働者毎に其爲に獨占せらると云はざる可からざるに於てをや。近年に至りリーフマンは、其の鋭き論法を以て、有限性の最も著しきは物質財に非ず、却つて勞働なることを痛論し、亦た予が本書に於て主張したると同じく、有限性を以て經濟の特色とする論を駁擊して餘蘊を

殘さず。予は氏が予の本書に後る事數年にして、同一の說を、斯くも有力に主張するを見て甚だ會心に堪へざるものなり。同氏原論第一卷第三編以下を見よ。

之を要するに　一有限と無限　二獨占と非獨占、共に土地の特質を示すに足らず、一と二とを同義とするは、混雜を增すのみ。土地の特質は唯一延長に在り、此特質こそ土地のみにありて、他の要素になきものなり。其他の論辯は多く正鵠を失せり。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

マ氏の第二章を二分し、其前半を本章とし、後半は第三章に讓れり。議論の內容正に斯くある可しと信ずるに依る。

第三章　土地の豐度（可變性）

土地は其特質として固有不變の延長性を有すること前章に說きたり。然れども唯延長ありと云ふのみにては生産は起らず、之に加ふるに可變の性質あるを要す。土地が生産要具として有する此可變の性質を總稱して其『豐度』fertility と云ふ。蓋し生産要具としての土地の用は種々ありと雖も、之を耕耘して收穫を收むる農業の用其重要なる者なるが故に、專ら農業に就て用ゐらるゝ豐度なる語を以て汎稱とするに至れるなり。豐度は延長に體現せらる、延長を離れて豐度を論ずること能はず。故に豐度の力を得て農業收穫を得んとする者は、必ず先づ一定の延長を有する土地（卽ち一定の土地面積）を占有するを要す。

土地の豐度は二要素より成る

一　土地の物理的性質

二　土地の化學的性質

是なり。今マーシアルは此二項を說くこと左の如し。

一　物理的性質の重なるもの

(a)　土壤は植物の根を自由に發育せしむる可き程度に於て柔軟ならざる可から

ざること共に而もまた植物の根を支持するに足る程度に於て緊固なるを要す。

(b)　水の流通自由に過ぐること砂地の如くなる可からず乾濕過不及しては共に植物を成育する能はず。

(c)　其反對に水の流通困難なること粘土の如くなる可からず、水と空氣の絶へざる供給は植物の成長に缺く可からず。蓋し水及空氣の供給ありて土中に存する無用有害の鑛物及瓦斯も猶ほ能く植物の養料となるを得るものなり。

新鮮なる空氣雨霜の作用は、自然的耕耘の用を爲すものにして、人力の加はるなくとも、此の天然の作用のみにて、相應の豐度を保つものなり。但し雨又は急流によりて土壤の流さるゝことなく、一度形成せられたる場所に其の土壤の止るを要す。此點より見るときは、土地の物理的性質は天然的の一與件にして人力の成果たらざるものなり。然り、然りと雖も實際に於ては此の天然的なる物理的性質も農耕の用に供せらるゝには、人力の助を缺く能はず。即ち人は土地を耕耘して土壤が植物の根を緩に而も確と保つを得せしめ、空氣及水の流通を自由ならしめて、此等天然の作用を促進し、補助するを要す。肥料を施すも單に化學的成分を變化せん爲めのみにあらず。土壤の物理的調理亦其の目的とする所なり。例へば粘土は之れを細分してより輕くより寛かならしめ、砂土は之れを緊固ならしめて植物の根を保持するの力を得せしむる等、何れも肥料の力に待つ所多きものなり。

二　化學的性質とは植物の根が吸收し得可き態に於ける無機物を保有するを云ふ。此化學的性質は人力を以て變化し得ること甚だ大にして、人が其働きにより土地の豐度を增すことを得るは主として此點に在り。一定の土壤中に不足する或化學的成分を加ふるにより其豐度を著しく增加するを得る場合稀ならず。殊に種々の態に於ける石灰、近世化學の產物たる諸種の化學的人造肥料は此目的に向て用らる。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

以上の物理的及化學的性質は、人力によりて增減せらるゝ可變的のものにして、此意に於ける土地の豐度は殆んど全く人間勞働の結果と云ふ可し。人は適當の勞力を土地に加ふるによりて著しく其物理的、幷に化學的性質を變化し、瘦土を化して膏腴の地となす

を得、土壤を改造して從來其地に適せざりし種物を繁殖せしむるを得、又輪栽法によりて地力を維持し幷に之を增進せしむるを得、疏水を行ひ其地に不足する化學的成分を加ふるによりて、土壤の性質を全然變ぜしむるを得るなり。而して此等の方法は過去に於ては未だ十分に行はれたりと云ふ可からず發達の餘地未だ甚多し。近き將來に於て蒸汽力と機械とを應用する大仕掛の土壤改良法の行はれんこと期して待つ可きなり。然れども今日に於ても既に舊文明國の土壤は大部分人間生産の成果なり。土地の上層は殆んど皆人間勞働の産物にして、此意味に於て純然たる資本の性質を具備するなり。リカルドが謂へる固有本來にして不可壞の力を有する天然の自由なる賜は、孰れも人力によりて著しく變造せられたるものならざるはなし。故に曰く、今日現在の（少くとも舊文明國に於ける）土地に就ては、土地の豐度は延長てふ不變性に附加せられたる可變性にして人力の結果なりと。

然るに土地が生産の用を爲すには豐度と相幷んで猶一の不可缺要件あり。氣候の關係是なり。土地の一定の延長は、其上に天然の與ふる熱光空氣雨等を享くることなければ、動植物の生命を維持すること能はず。此の氣候的關係は大體に於て人力を以て左右し能はざる不變條件なり。ブ師曰く、

Allerdings kann der Mensch in gewissem Masse auch die klimatischen Verhältnisse beeinflussen; durch Anbau oder Abholzen der Wälder, durch Entwässerung und Bewässerung. Aber auch in dieser Beziehung ist das, was er zu leisten vermag, gering im Vergleich zu den durch die Natur geschaffenen klimatischen Grundbedingungen, wie sie die geographische Lage mit sich bringt. Von den klimatischen Verhältnissen aber hängt es ab, in welchem Masse Wärme, Licht, Luft und Fruchtbarkeit auf einem einzelnen Flächenstück zur Verfügung stehen, und davon hängt es ab, ob und was auf einem Flächenstück produziert werden kann……Agrarpolitik. S. 6.

……Diese klimatischen Eigenschaften sind ebenso, wie die Ausdehnung und Tragfähigkeit inhärente Eigenschaften der einzelnen Flächenstücke. Der Mensch kann nur wenig daran ändern. Agrarpolitik. S. 7.

光も人間は或程度までは、森林を新に造り又は既存林を伐採するにより、疏水により、灌漑によりて氣候的關係を左右し得可し。然れども此點に於ても人間の成し得る所は、地理

上の位置に於て天然が與定せる氣候上の根本條件に比するときは甚だ微々たる者なり。而して斯く專ら天然によりて定められたる氣候的關係は、また一定の面積が享くる所の溫度・光・空氣及豐度を定め、而して亦此によりて其一定の土地に栽培す可き種物の種類定めらるゝなり『農政學』第六頁

故に土地の氣候的性質は延長及び負擔能力と共に一定の土地に固着本來の性と云ふ可く、人の之を變じ得ること誠に僅なるものなり。『農政學』第七頁

マ氏も亦曰く、

Every acre has given to in by nature an annual income of heat and light, of air and moisture; and over these man has but little control. He may indeed alter the climate a little by extensive drainage works or by planting forests, or cutting them down. But, on the whole, the action of the sun and the wind and the rain are an annuity fixed by nature for each plot of land. Ownership of the land gives possession of this annuity: and it also gives the space required for the life and action of vegetables and animals; the value of this space being much affected by its geographical position. S.E. p. 147.

土地の一定面積は必ず天然が之に賦與する熱・光・空氣及濕度の一定量の年分所得を有す。人は之に對して殆んど何等の力を及ぼすこと能はず。尤も人は大仕掛の疏水又は森林の造植若くは伐採によりて少しくは氣候に變化を起さしむるを得ざるにはあらざるも、大體に就て之を見るときは、太陽・風及雨の作用は、一定地面に對し天然が定めて與ふる一定の年分所得なりと云はざる可からず。土地を所有するものは、同時に此年分所得を享有するを得ること動植物の生活及行動に要する空間に同じ。而して此空間の價値は其地理的地位に依る年分所得の多少によりて大に左右せらるゝものなり。

誠に然り、土地の氣候的關係は、人力を以てしては殆んど如何ともする能はざる不變的條件なり。此點より見てブレンタノ、マーシアル兩氏が氣候は土地に特殊なる不變性なりと云ふは、不當の論にあらず。然り然りと雖も、此不變的條件は、延長の如く土地其ものに固有本來の性質にはあらず。唯一定の延長を有する土地が受動的に享受する天然的條件たるのみ。之を延長と同一視して、土地本來固有の特性と云ふは非なり。ブレンタノ師の言此點に於て當を得ず。マ氏の如く一定の面積卽ち延長の土地を有するもの

が、必然的に享受する外來的所得なりと云ふこと遙かに眞相を得たり。氣候は不變的の天然條件なりと云ふは、土地其ものゝ不變性の意にあらず。此點に於て氣候は亦豐度とも異る。豐度は土地其ものゝ收穫力を意味す。氣候は直ちに土地其ものゝ力にあらず。之を譬へて言はゞ、猶海岸に別莊地を買ふものが海上の眺望を享受するを得るが如し。海上の眺望は、其別莊地の性質にあらず、唯之を享受し得る機會が其一片の土地に對して附與せらるゝのみ。兩者決して混同す可からず。マーシアルの此點に關する所論は包括的に過ぎて此區別を沒するの嫌なきにあらず。曰く、

We may then continue to use the ordinary distinction between the original or inherent properties, which the land derives from nature, and the artificial properties which it owes to human action; provided we remember that the first include the space-relations of the plot in question, and the annuity that nature has given it of sun-light and air and rain; and that in many cases these are the chief of the inherent properties of the soil. It is chiefy from them that the ownership of agricultural land derives its peculiar significance, and the Theory of Rent its special character. 8. E. p. 147.

故に吾人は土地の性を天然より享受する本來固有の性と、人力を以て得たる人爲の性とに分つ通說を襲踏して差支なかる可し。唯だ前者の中には、土地の面積關係（卽ち地理的の地位を云ふ）と、天然の與ふる日光・空氣・雨の年分所得とを含むものにして、土地固有本來の性と普通に云ふときは、專ら此を意味するものなるを記憶するを要す。農業用の土地の所有が特殊の意義を有し、從つて又地代に關する學理が特別の性質を具ふるは、主として此等年分所得存するに依る。

と。此論服し難し。

土地の所有が他物の所有と異る特殊の性質を具へ、從て地代が他の種類の所得と異る原則を有するは直接に此の『年分所得』存在の結果と認む可からず。一定の延長を所有するてふ事實こそ特殊の性質を附與するなり、年分所得は此延長と關連して土地所有者が享受するものゝみ。延長の所有と云ふことの內容は此年分所得にあること、正にマ氏の言ふ如くなれども年分所得其ものが直ちに土地の所有に特殊の意義を附するにはあらず。年分所得は延長に體現せられ、之に內容を與ふるものにして、從て間接には、土地

F. I, 37.

所有に特殊の原則を生ぜしむるものなりと雖も直接には延長の所有の作用あるのみ。故に年分所得を享受するてふ事實を目して直ちに土地の不變性と云ふは事實に反し又た論理に合はざるものなり。

マ氏が最終節に論ずる問題は此の不變性と可變性換言すれば天然の力と人間の力との厚薄大小是なり。曰く土地の豐度の天然の力によると人間の力によるとの多少は必ずしも一樣ならずして植物の種類により異るものなり。或種の植物は人力によりて著しく收穫高を增すを得或ものは人力が收穫高を左右する餘地甚だ尠し。後者の適例は森林の樹木の如き是なり。樫は一度適當に栽培し十分の空間を與ふるときは其以上人力を加ふ可き餘地殆んど無く自然に成長するを待つ可きのみ。土質豐沃にして疏水宜しきを得たる河床に生長する草の如き、また人力に待つことなくして繁茂す。永久的牧地は之に比すれば豐沃ならざるも亦た人力を藉ることは甚だ少し。然るに耕地に至りては天然の力に一任することは能はず人力を要することは大なり。即ち種物の性質に應じて地床を準備し種を播き雜草を除くに多大の勞力を要す。就中人力を要する最も多きものは菓實花卉及種改良用の動植物是なり。人は自己の用に最も適する種を撰みて培養し發達せしむ。天然に任すときは天然は其自らに最も適せる種を生存し發展せしむるも其は人間の用に對しては必ずしも最適種にあらざることは多し。故に人は此間に干渉して自己の用に供して最も適せる種を育てざる可からず。斯くて人の用に供して最も肝要なる現存の動植物の種類は殆んど皆人間粒々辛苦の結果として得たるものにして天然其儘のものは一も存することなし。

土地の豐度に就て天然の働と人間の力との厚薄多少の差ある斯くの如しと雖も其何れの場合に於ても人間は其働を土地に加ふること無限無終なるものにあらず。其働きを加ふるによりて得る增收彼が勞と費とを償ふに足らざるに至れば其働を停止して全然天然の力に一任するに至る。是を稱して收穫遞減の作用と云ふ。請ふ章を改めて之を論ぜん。

第三章　補　論

本章參考書

Roscher, System der Volkswirtschaft. I. S, 35.

v. d. Goltz, Handbuch der gesamtem Landwirtschaft. Tübingen 1889. II. S. 3.

Pesch, Lehrbuch der Nationalökonomie. IV. Bd. 1 u. 2. Aufl. 1922. SS. 441.

Schmoller, Grundriss. 11-12 Tausend. 1919. SS. 127 ff.

此書には詳細の參考書目揭げあり、就て看る可し。

* * * * * * *

本章はマ氏原論第二章の二・三・四節に該當す、之を前章と分割せるは、內容の性質上必要と認めたるに依れり。

第四章　收穫遞減の法則

土地の豐度は人力を以て增加し得可き可變條件なること、前章粗々之を明にせり。然るに茲に續て考ふ可きは、此增加も亦無限なる能はず、或程度以上に及ぶときは、人力を加ふる愈々多くして增加の量愈々減ずるの理是なり。之を收穫遞減の法則と名く。マーシアルは此法則の要旨なりとして曰く

An increase in the capital and labour applied in the cultivation of land causes in *general* a less than proportionate increase in the amount of produce raised, unless it happens to coincide with an improvement in the arts of agriculture.

土地の耕作に用ゐらるゝ資本及勞働の增加は、農業技術の進步之に伴ふにあらざる限り大體に於て比例以下の生產額增加を惹起す

と。換言すれば土地に加ふる資本及勞働を增すも其增したる割合丈けの增收は起らず、總量に於ての增收は比例の上に於ては却て減收となる傾向を指して土地收穫遞減の傾向と云ふなり。但し此傾向は或程度までは却て反對の傾向の爲めに打消さるゝことあり、反對の傾向とは收穫遞減に對して『收穫遞增の傾向』と名く可きものにして、土地に加ふる人力の高多きに從ひ收穫は總量の上に於てのみならず、比例の上に於ても增加するを云ふ。新たに土地を開墾するとき若しくは粗放耕作より集中耕作に移るときの如きは、一反歩に加ふる資本勞働の量を增すにより著しく收穫を增すは、收穫遞增の傾向の作用なり。然れども收穫の遞增は或點に至りては必ず停止し、終には反對に收穫遞減の傾向顯はれ來るは、土地に於て免る可からざる現象なり。蓋し地力に限度あり、人力を加ふること如何に多くとも此限度以上の收穫は土地之を生ずるの力なし。故に資本勞働の增加を絕へず繼續し行くときは、晩かれ早かれ何時か一度は必ず遞減傾向の働き來るを免かるゝ能はざるものなり。經濟學の通說に於て、此理を說明せんとして、一エーカーの土地を以て英國の全人口を養ふ能はざるは、收穫遞減の働きあるに依ると說くは、此意味を强めんと欲するに過ぎずと雖も、斯く云ふときは、一臺の織機を以て英國民全體の一ヶ年の衣服を織り出す能はざるも、一人の勞働者にて之を縫ひ終り能はざるも、亦た共に收穫遞減の働きに依ると云はざる可からず。斯くの如きは到底無用の冗辯たるを免れず。マーシアルは稍々其嫌ある說明を試みたり。曰く

Were it not for this tendency every farmer could save nearly the whole of his rent by giving up all but a small piece of his land, and bestowing all his capital and labour on that. If all the capital and labour which he would in that case apply to it, gave as good a return in proportion as that which he now applies to it, he would get from that plot as large a produce as he now gets from his whole farm; and he would make a net gain of all his rent save that of the little plot that he retained.

此收穫遞減の傾向だになかりせば、凡の農夫は極小面積の土地を耕し、之に其資本と勞働の全部を傾注することゝし、其餘の土地は之を地主に還附す可ければ、從來支拂ひ來れる地代の殆んど全部を節約するを得可きなり。此場合に於て彼が用ゆる資本勞働が現在

用ゆる場合と同一比例の收穫を生ずるものとせば、其極少面積より得る收穫高は、現在の耕作面積全部より得る高と同一なる可く、從つて農夫は其極少面積地の地代以外の地代全部を純益として收得するを得む

と。然れども斯く言ふときは、土地のみ然るにあらず、資本に就ても、勞働に就ても、吾人は同一言を繰返して例へば、

『收穫遞減の傾向だになかりせば、凡ての工場主は極少數の機械のみを使用し、之に原料と勞働との全部を傾注することゝし、其餘の機械は之を賣却す可ければ、從來機械に投下したる資本の利子の殆んど全部を節約するを得可きなり。此場合に於て彼が用ゆる資本勞働が現在用ゆる場合と同一比例の生産高を見るものとせば、其極少數の機械より得る生産高は、現在使用機械總數より得る高と同一なる可く、從て工場主は、其極少數の機械に對する利子以外の機械投下資本の利子全部を純益として收得するを得む』

と云ひ、又は

『收穫遞減の傾向だになかりせば、凡ての雇主は極少人數の勞働者のみを使役し、其餘の勞働者は之を解雇す可ければ、從來支拂ひたる勞銀の殆んど全部を節約するを得可きなり。此場合に於て彼が使役する勞働の生産高が現在の生産高と同一比例を有するものとせば、其極少人數の勞働者の生産效程は、現在の多人數の效程と同一なる可く、從て雇主は、其極少人數の勞働者に對する勞銀以外の勞銀全部を純益として收得するを得む』

とも云ひ得可き筈なり。而して近時の學者中間々斯くの如き邊まで收穫遞減の法則を擴張せんと欲するものなきにあらず。セリグマンの如き是なり。曰く

The law of diminishing returns is indeed the foundation of the law of rent……In every case he will reach the extensive or intensive margin of the utilization of land. This, however, is not peculiar to the landowner. The capitalist will also reach a point where it will not pay him to buy more machines of a certan kind, or to build another factory devoted to some particular product; and the laborer will reach the point where he cannot profitably work any longer. The law of diminishing re-

turns is universal, and applies to everything that possesses value. If it explains the rent of land, it will equally explain, as we shall see, the interest of capital and the wages of labor.——Principles. §160. 4. Ed. 1909. p. 373.

收穫遞減の法則は疑もなく地代の法則の根柢なり。……何れの場合に於ても彼（地主）は土地利用の外延的又は內延的限界に到達す可し。然れども此は地主のみに特有なる事柄にあらず。資本家も亦或一種の機械をより多く買ひ若くは或特定の生産品に限られたる工場を增設するに收支相償はざるを見る點に到達す可し。勞働者も又より多くの機會を引受くるに不利なる點に達す可し。されば收穫遞減の法則は一般的にして、苟くも價値を有する總てのものに行はる。從つて此法則が土地の地代を說明する以上、亦之と同じく資本の利子及勞働の賃銀をも說明するを得可きものにして、後段之を立證せんと欲す

而して氏は利子及勞銀にも收穫遞減の法則を適用して說明を試みたり。氏に於ては誠に論理一貫するものにして敬服す可き所なり。予も亦嘗てセ氏の著未だ世に出でざる前同樣の考を抱きて、立論したることあり。近くは地代餘剩論に就て、此論法を用ゐて、通說の基礎に一擊を加へんと欲したることあり。

國家學會雜誌二百五十四號「地代は餘剩なりや」今は、續經濟學研究二二—三〇頁に全文を收錄す）

今參考の爲め右論文の末項一節を左に摘記す。

「然らば卽ちリカルドの地代論は破れたるか。曰く未だし。

リカルドが地代のみを以て餘剩なりとしたるに猶一の場合あり。同一地にても耕作の進步に伴ひ亦餘剩を生ず、此餘剩は卽ち地代なりと說く是れなり。曰く人口增加し未耕地なきに至れば更らに既耕地に就て穀物の增穫を圖らざる可からず。然るに一定の限度までは、其增穫は增費（資本及勞働の）と比例を維持す可しと雖も、其以上は遞次に其比例を減ず可し。是を收穫遞減の法則と云ふ。收穫遞減の法則は言ひ換れば、生産費遞增の法則なり。生産費遞增とは最高の生産費を稱するものゝ遞增することを言ふなり。（凡ての生産費の遞增にあらず）最高生産費高まれば、此の點に於て定められゝ穀價は亦た騰貴す。穀價高まれば最劣等地以外の他の土地の收益之に應じて增加す（收穫は異ならざるも之れを貨幣に換へたる額多きが故）。此の增收益は又た競爭の結果として、他

に事情なき限り、増土地の所有者即ち地主の有に歸す。即ち此場合に於ても地代は亦た餘剰なりと。

然れども同じ前提の下には、勞銀も、利子も、利潤も亦た皆同じく餘剰なり。故に殘る問題は收穫遞減の法則は土地のみに行はれ資本・勞働・企業に及ぼさるや否や是れのみ。而して近來の通說は收穫遞減の法則は、土地のみに行はるゝものにあらずして、與へられたる條件の下には、凡べて行はるゝものなるを主張するに於て一致す。而して又收穫遞增の法則なるものも一般に存すと認めらる。土地の收穫はリカルド以後今日まで大體に於ては減少せずして却て著しく增加したることは誰人も否定するを得ざる現成の事實なり。然らば地代のみが餘剰なりとの主張は到底之れを維持す可からざるを知る。」

マ氏も亦云ふ

If a manufacturer has, say, three planing machines, there is a certain amount of work which he can get out of them easily. If he wants to get more work from them he must laboriously economize every minute of their time during the ordinary hours, and perhaps work overtime. Thus after they are once well employed, every successive application of effort to them brings him a diminishing return. At last the net return is so small that he finds it cheaper to buy a fourth machine than to force so much work out of his old machines: just as a farmer who has already cultivated his land highly finds it cheaper to take in more land than to force more produce from his present land. Indeed there are points of view from which the income derived from machinery partakes of the nature of rent: as will be shown in Book V. 8. E. p. 168

例へば一製造家が三臺の機械を以て生産に從事する場合に、其生産高を增加せんには勉めて時間を節約し又之を延長す可し。斯くて力を加ふること愈々多きに從ひ、生産の增加は遞減す可く、終には其增加甚少くして、其以上の力を三臺に加ふるより、更らに一臺の機械を增設するを利とす可き點に達すること、農夫が一定の土地に更らに資本勞働を增し加ふるよりは、新たに耕地を附け加ふるを利とする點の至ること其理同一なるを見る。されば此意味に於て、機械より生ずる所得は、地代の性質を具備すと認むるを得可きなり。此點は後段第五編に於て詳論す可し

マーシャルの立場は明確を缺くもの多し。氏は唯專ら土地のみに就て、收穫遞減を論ずるに、右に掲げたる如き大體論を敢てす。予は之に與する能はず。マ氏の不統一は之れに止まらず。氏は既に需要論に於て『利用遞減の法則』を論述したるに、予の示めし

たる所なり。然るに『利用遞減の法則』は畢竟する所收穫遞減の法則の變態に外ならず。否收穫遞減の法則の働きは『限界利用均等の法則』を根據とするものなることは、マ氏も之を認むるもの、如し。

氏云ふ。

> But if he has made his calculation rightly, he is using just so much ground as will give him the highest return, and he would lose by concentrating his capital and labour on a smaller area.
>
> 之に反し彼（農夫）が計算を謬らざるときには彼は最高の收穫を與ふ可き丈けの土地を耕しつゝある可きなり。されば此場合には、より小なる面積に其資本と勞働とを集中するにより却て損を招く可きなり。

『最高の收穫を與ふ可き丈けの土地』とは、『最大の限界利用を有する土地』と同意義なり。農夫は常に其耕す土地に最大の限界利用を求むればこそ收穫遞減の法則に觸るゝなり。所謂耕作の限界 margin of cultivation（後段を看よ）とは土地利用の限界を言ふものに外ならず。耕作の限界は農夫に取りての均等的限界利用點なり。利用に遞減なければ限界利用なるものなきが如く、土地收穫に遞減なければ耕作の限界なるものあることなし。然れば收穫遞減の法則とは利用遞減の法則の土地に適用せられたるものに外ならざることゝ一點の疑を容るゝ餘地なきを知らん。マーシアルは一面近時の學說たる利用遞減論を採り乍ら、他面には、リカルド一流の傳說を擁護せんとの矛盾的態度を取る結果、如斯透徹せざる論述を爲すの已むなきに至れるものにして、氏の根本的の病予が繰返して遺憾とする所なり（但し氏は後段產業組織論に於て收穫遞減遞增の兩法則を再論す）。

遞莫近時の新說たる『利用遞減』論は『收穫遞減』論の換骨奪胎のみ。後者は源にして前者は流れなり。マ氏が重きを源に置き流を輕く見るは學說發展の行程に於ては、決して不當の處置にあらず。何故一般的原則としての利用遞減の法則が公認の學理となることゝ斯くの如く晩く却て特殊的應用の一場合たる收穫遞減の法則の早く認められたりや。此問に答ふること容易なり。凡そ社會の複雜なる現象を研究の對象とする學問、其中にても殊に經濟學に於ては眞理は先づ部分の具象的事物に就て見出され、一般的總括現象に就ての定理となること遙かに後るゝを常とするものなり。土地殊に其農耕

的使用の上に於ける利用（收穫）遞減の現象は最も顯著なる實際上の具象的現象にして、尚くも少しく心を農事に用ゆるものは之に着眼せざる能はず。マ氏自ら云ふ

……the fundamental idea, which it (law of diminishing return) expresses, has been the common property of every one who has had experience of agriculture whether arable or pastoral, since the world began. What economists did for the law a century ago, was not to discover it; but to give it definiteness, and to deduce inferences from it. — Note on the law of diminishing return. J. E. p. 170.

收穫遞減の法則の言表はす根本的思想は、世界の始より耕作にせよ、牧畜にせよ、農業に從事したるものゝ普く知悉せる所にして、一世紀前の經濟學者が此法則に關して爲したることは始めて此法則を發見したるにあらず、唯之を精確に言明し、又之より推論を下したる事にあり

こと。誠に然り。農夫が日常の經驗に於て知悉せるもの、チュルゴー、アンダーソン、ウエスト、マルサスを經てリカルドに至りて『收穫遞減の法則』となれるなり。而して利用遞減の傾向の中、今日に於ても猶土地收穫遞減の傾向は人の注意を惹くこと著し。是れ經濟學に於て土地に就て此法則を說くに重きを置く所以にして其は必ずしも失當と云ふ可きにあらず。

然り而して收穫遞減の法則が十九世紀の初に於て英國學者によりて學問上の公理として建設せられ爾後各國の學者の祖述する所となりしには特に學者の注意を要する事情ありて存せり。其は他にあらず、收穫遞減の法則の理論は、十九世紀の初葉に於ける英國の實際上の國情に胚胎して起り、殊に彼の有名なる『人口過剩の問題』と相關連して、經濟學の範圍に入り來れるものにして單獨に一の純理論として忽如唱道せられたるものにあらざること是なり。此事情を念頭に置かざれば、收穫遞減の理論は興味索然たるものとなる可し。キアナン曰く

If we knew nothing of the previous history of the question we should be at a loss to conceive why Mill should be at the trouble of developing a law which

(1) does not come into operation at a very early date in the history of society;

F. I, 38.

(2) is liable to temporary supersessions; and

(3) has been made head against by an antagonizing principle, namely, the progress of civilisation, throughout the whole known history of England. — Cannan, Theories of production and distribution. 2. E. p. 177.

収穫遞減の法則は

一　社會の歴史の初期に於ては行はるゝことなく

二　（行はれて後も猶ほ）屢々中斷せらるゝことあり

三　英國歴史の全期を通じて其反對の原則卽ち文明の進歩によりて對抗せらるゝものにして（之を一般の學理とする價値なきものなるに）ミル（の如き學者）が其論述に力を惜まず腐心するは、此問題の以前よりの沿革を知らざれば、誠に解し難き所なる可し

と。予は此言を移して、更らにミル以後の諸學者就中マーシアルに適用せんと欲す。經濟學正統派の擁護者にして、殊に英國の學者たるマーシアルが收穫遞減の法則に甚しく重きを置きて利用遞減の法則を忘れたるが如き態度を取ること、此問題の歴史、殊に英國に於ける發生當時の事情を知るものは、其解釋に苦まざる可し。然らざれば、マ氏の立場は、餘りに守舊的、餘りに學究的にして、其眞意の存する所を察し難からんなり。今以上の用意を以て以下マ氏の説く所を聽かん。

* * * * * * *

收穫遞減の傾向は、合理的に農業を營む總ての農夫の必ず認めざるを得ざる所なれども、人間に免れざる虚榮心の爲め耕作地面の廣きを誇らんとして、其力に及ぶ以上の面積を耕作する農夫少しとせず。アーサー・ヤング以後農學者が常に此弊を指摘して農家を警めつゝあるを以て知る可し。耕作面積を狹くせよと警告するは、必ずしも之によりて總收穫高の增すが爲めにあらず。土地を狹くするによりて得る地代の節約が多少の減收を償ひて餘あるとき、卽ち純益高の增す可きときは、面積を減ぜよと云ふなり。例へば

一　收穫高の四分の一を地代として支拂ふ場合に於て

二　面積を減ずるにより一エーカーに付從前の收穫高の四分の三以上の增收あるとき

きは面積減少を利とすると云ふが如きなり。

又耕作法の改良進歩起るときは資本勞働を增加して却て遞增的收穫を得るの餘地多く英國に於ても總ての農民が最上の農民の程度にありたらんには今日現在の二倍の資本勞働を土地に傾注するも猶遞增の利益ある可し。然れども此は假想に過ぎず實際英國今日の狀態に於ては耕地面積を減じて、より少き面積に資本勞働を集中するときは收穫遞減の傾向起るを免れざるものと云ふて可なり。

右云ふ收穫とは實物の收穫を指すものにして貨幣價値の額を云ふにあらず。即ち穀價の變動より起る凡ての作用は直接には收穫遞減の法則と關係なきものなり（但し其の實際上の作用に就ては大に關係あること勿論なり）。

依て此法則を要言するとき大體に於てなる制限を加へたるの意を茲に明言するを得可し。收穫遞減の法則は、生産技術の進歩並に地力の偶發的增進によりて暫時其働きを中斷せらるゝことある可し。然れども土地の收穫物に對する需要が際限なく增進する以上は、晩かれ早かれ一度は免れざる傾向なり。仍て此法則の定義は、二部に分つこと左の如くするを得可し。

一　農業技術の進歩改良は資本勞働の一定量に對し土地が一般に與ふる收穫の割合を高むることある可く、或土地に既に用られたる資本と勞働の量從來甚少かりし爲め全地力を出さしむるに足らず從て其量を增すときは農業技術に改良進歩起らずとも、比例以上の增收を見ることある可しと雖も、此等の事情は舊國には稀に起る現象なり。されば此等事情の存せざる所にては土地に資本と勞働とを加ふること多きに從ひ、（耕作者の熟練增進せざる以上）生産高の增加は比例以下に落つ可し。

二　將來に於て農業技術如何に發達するとも、土地に資本勞働を增加して已まざる時は、終には、一定の資本と勞働の增量によりて得可き增收に減少を招致せざる能はず

さて、ジェームス・ミルが嘗て用ゐたる語を襲踏するときは、土地に充用せらるゝ資本と勞働とは均一なる繼續的諸『定量分』equal successive *doses* より成るものと云ふを得可し。即ち收穫遞減の傾向を此語を用ゐて言表はさんには

初めの若干の定量分に對する收穫は小にして、更らに增し加ふる定量分に對する收

穫は比例以上なることありて繼續的定量分に對する收穫ば或は增し或は減ずることある可しと雖も晩かれ早かれ、（無論耕作技術に變化起らざるものと假定するときは）其後の增加定量分は從前の定量分に對するより低き比例に於ける收穫のみを與ふる點に到達す

と云ふを得可し。

而して耕作者に取りて恰も收支相償ふ點の定量分を稱して『限界定量分』と云ひ、之に對する收穫を『限界收穫』と稱するを得可し。收支相償ふのみにして、地代となる可き餘剩を毫も生ぜざる土地ありて、限界定量分は此土地に加へられたるものと假定するときは此土地は『耕作の限界』にありて、限界定量分は耕作限界に在る土地に加へられたるものと云ふも亦妨げず。但し事實に於て斯く耕作の限界に在る土地存すとの意にあらず。而して又限界或は最終定量分 marginal, or "last" dose と云ふとも、其は時間の上に於ての最終の意にあらず。適用行程の順序に於ての最終段の意なり。時の上より云へば、最終定量分却て其前の定量分に先つことあり。肥料の最終定量分よりは、刈入に用ゆる資本勞働の定量分の方、時の上に於ては、遙かに後なるが如き是なり。

マ氏は次に限界利用の理論を此定量分に應用して左の如く云へり。

Since the return to the dose on the margin of cultivation just remunerates the cultivator, it follows that he will be just remunerated for the whole of his capital and labour by as many times the marginal return as he has applied doses in all. Whatever he gets in excess of this is the *surplus produce* of land. This surplus is retained by the cultivator if he owns the land himself.

耕作の限界に於ける定量分に對する收穫は、耕作者に取りて、恰も收支相償ふものなるが故に、其結果として、彼が其用ゐたる資本と勞働とに對し、恰も收支相償ふ可き收穫は、限界收穫に乘ずるに、充用したる定量分の總數を以てしたる高に相當す可し。此高以上に彼が得る所は、之を名けて土地の『餘剩收穫』と云ふ。耕作者自ら其土地を所有するときは、彼は此の餘剩收穫の全部を收得す。

更らに、耕作者と地主と人を異にするときには、此餘剩收穫は或條件の下には、地主が地代として收得することある可し。但し地代は之れのみにて成るものと限らずと。

マ氏はリカルドを擁護せんとしてリカルドは專ら英國に就て立論したるものなるが故に最初の定量分に對する收穫を最大と假定し、以下直ちに遞減傾向顯はるゝものと論じたり。蓋し舊國に就ては、開墾の業は既に成し終りたるものと推定するは當然にして、定量分を增すによりて、收穫遞增するが如き程度を脫したるものと見て差支なければ、リカルドが英國の如き舊國に就ては、收穫遞增の作用を全然考慮外に置きたるは至當なりと辯ぜり。此は聊か强辯の嫌なきにあらざれども、一概に不通の論として排す可きにあらず。唯此の論を執て直ちに實際生活に應用せんとするは不可なり。實際に於ては開墾の時代を距つる遠き土地にありても、收穫遞減の傾向行はるゝや否やは、個々の場合に就て、觀察するを要するものにして、リカルドの謂へるが如き意に於て此法則行はれ居るものと推定するは甚だ謬れり。

マーシアルは次に收穫遞減並に遞增の割合を論ず。曰く天然の力と人の力との生産に於ける割合は、土地の性質、生産物の種類、並に耕作方法によりて同じからず。概して之を云へば、人力の割合は、森林に於て最も少く、牧地之に次ぎ耕地に至りては大に增加す。耕地の中にても plough land より spade land の方多し。是れ收穫遞減の作用が森林に於て最も大にして、以下減じ行くが所以なり。

土地の豐度には絕對的の標準なし。生産技術に何等の變化起らざるときと雖も、生産物に對する需要の增加する事情丈けにて甲乙兩地の豐度を轉倒することなきに非ず。耕耘せざるとき又は僅かに耕耘するとき豐度低かりし土地が、十分耕耘せらるゝに及びて、從前豐度高かりし土地よりも却て豐度高くなることあり。換言すれば、粗放耕作のときと、集中耕作のときと、豐度却て轉倒するとあり。牧地を變じて耕地と爲す場合、或は其反對の場合、水多き沼地に疏水を行ふ場合の如きに於て此事は屢々起る所なり。卽ち是より生ずる結論は、收穫遞減の傾向一度起る後と雖も、必ずしも此傾向のみ續て行はるゝものにあらず。其中斷せらるゝことあり、反對に收穫遞增の傾向起ることありて、收穫は遞減し遞增し、又遞減するが如く、相交錯することは是れなり。土地は猶連鎖の如し。連鎖の力は其最弱の鎖の力によりて定めらるゝ如く、土地の力は其最貧要素の力によりて定めらる。（此理を農業經營學にては最小律と稱す。稻垣乙丙博士に『最小律の展開漸減

則の充實』なる有益の研究あり。就て見よ。）　然れども餘裕ある人々は、一二の脆弱なる鎖あるも全體は強き連鎖を撰び其脆弱なる鎖を強き鎖と換へて、爲めに著しく力強き連鎖を得可しと雖も、修復の期間を待つ能はざるものは全體の力左迄強からずとも特に脆弱なる鎖なき連鎖を擇ぶなる可し。土地も亦然り、先づ新國に就きて、土地を開墾するものは、全體の豐度左迄高からずとも著しき缺點を有せざる土地を擇んで耕す可しと雖も、開拓の業稍々進むときは、耕作者に資本と勞働の餘裕あるが故に、著大なる缺點ありとも、此缺點をさへ除却すれば、高き豐度を生ず可き土地を求めて、之を耕耘するに至らん。是れ農業史上屢々多少の改良により突然著しく收穫の增收する場合ある所以なり。米國に於ては、殊に如此事例を見ると稀ならず。されば土地の豐度なるものは、絶對的のものにあらず、時と所とに從ふ相對的のものなるを知る可し。吾人は　一耕作者の熟練能力　二其供し得る資本と勞働の量　三其生産に對する需要の多少等を知るにあらざれば、甲地は乙地より豐度高きか低きかを判定する能はず。特定の時と所に於ける特殊の事情と關連せずしては、豐度なる語は、何等の意味を成さゞるものなり。斯く限定したる上にても、猶豐度なる語の用法一定せりと云ふ可からず、殊に、

一　集中耕作に對し十分の收穫あり、一定面積（例へば一エーカー）の收穫總高多きを豐度高しと云ふと、

二　總收穫高は多からずとも餘剩生産高卽ち地代額多きを豐度高しと云ふときとの二個の著しく相異る用法あり。英國に就て云へば、耕地の豐度高しと云ふは　一の意味に於て云ふものにして、牧地の豐度高しと云ふは　二の意味に於て云ふものなり。然れども多くの場合に於ては、兩者の別左迄重きを置くに足らず、何れの意にて云ふも同一なりと見て左したる差支なし。

又耕作方法の變遷及び穀物の相對的價格の變動によりても、各種の土地の豐度の高低に變化を生ず。十八世紀の終、コークが地質輕き土地は先づ苜蓿 clover を植へて後、小麥を播くときは、收穫增す可しとの理を發見したるが爲め、從來豐度勝れりとせられたる粘土よりも、輕土の方豐度高くなりしが如きは、耕作方法の變ずるにより、豐度の順序轉倒したる一例なり。又た中央歐羅巴に於て、燃料として、又建築材料として、木材に對する需要

増進したるにより、松山の價格は、他の總ての他種に對して増進したる實例あり。然るに英國に於ては、燃料としては、木の代りに石炭を用ひ、造船用材には鐵を用ひ、又た木材を輸入する便ある爲め、如斯騰貴を見ざりき。又米及黄麻の耕種を始むるときは、他の種物には水分多きに過ぐる土地却て價格騰貴す。英國に於て穀法廢せられてより以後は、肉及乳産物の價は穀物に比して騰貴せり。而して大體に於ては人口の増加して食料に對する需要増加するに從ひ價格の騰貴すること貧地の方却て富地よりも多し。かくて地價は均一に歸するの傾向あり。蓋し土地に對する需要増すに從ひ從來缺點多しとして捨て置かれたる土地に改良行はれ從つて地力を増進するに至るも其理由の一なり。其反對に近來米國の競爭の爲めに英國農業の不況に陷れる結果は、富地よりも貧地の價格を著しく下落せしめたり。殊に資本勞働を多く費すときは相應の收穫あるも、之を減ずるとき收穫著しく減ずる土地は著しく其價格を減じたり。

以上縷述せる所により土地の豐度には絶對的標準なきことを知る可し。今耕作に就ても然り。耕作の良否と云ふは相對的の語にして、絶對的には意味を成さず。海峽諸島の最豐地の最良耕作とは、一エーカーに對し非常に多額の資本勞働を費すの謂なり。此等諸島は英國の市場に近く、本土よりは早收を得可き氣候を獨占す。然るに天然のまゝにては其土地は二個の大缺點（燐酸の不足とポタシュの不足）を有する爲、收穫甚だ乏し。然るに人力の助により殊に海岸の海草を肥料とするときは、此缺點を補ひて其豐度は非常に高きものとなるを得。かくて一エーカーより『走り』の馬鈴薯價格百磅を收穫するを得るなり。然れども此は走りの馬鈴薯を價高く買ふ英國市場近くに在るが爲め斯くの如き『良き耕作』を行ふを得るものにして、同一の耕作法を西部米國に行はんか、收支到底償はず、卽ち良き耕作にあらずして、惡き耕作法たらんのみ。耕作方法の良否も畢竟時と所とに應ずる相對的事情によりて判定す可きものにして、各地各時代を通じて耕作法の良否を論ずることは不可能なり。

マーシアルは以下五、六、七の三節に於てリカルドを擁護し其所論の缺點と認めらるゝものは、解釋の如何によりては、必ずしも缺點たらざること、ケリーの彼に對する攻擊は多くは誤解に基くこと、ケリーの所論にも執る可き所あることなどを述べ續て耕地以外の

他種に行はるゝ收穫遞減の傾向を論じ海濱山住居用の土地に就て耕地と趣を異にする點を擧げたりと雖も今細說の要を見ず故に省く。章尾の補註亦之に準ず。

第四章　補　論

收穫遞減の法則が經濟學上の定理となりしは佛國との大戰爭中に於ける英國特有の事情に基けるものにして殊に後章に說く可き人口增加の問題と密接の關係を有するものなることは本文に說けり。今此の事情を叙述して最も明確精緻なるはキアナンの論なり。曰はく

Theories of Production and Distribution. 2. E. 1903.……（後版異同なし）

百四十七頁以下百八十二頁までにあり。就て見る可し。

キアナン曰く

It is impossible to read West's pamphlet without seeing that the form in which the "law of diminishing returns" was subsequently taught, and the phraseology in which it was expressed, are far more due to him than is imagined by those who only know him as the subject of a civil reference in Ricardo's preface. But for securing the "law of diminishing returns" the prominent place which it has occupied in English political economy, not West but Malthus and Ricardo are responsible. p. 160.

ウェストの書を讀むものは「收穫遞減の法則」として後世教へらるゝ其形式並に此法則を言顯はす用語も共にリカルドの序文中にある鄭重なる引照の主體としてのみウェストを知る人の想像より以上に彼（ウェスト）の賜なることを信じざる能はざる可し。然れども收穫遞減の法則をして英國の經濟學上斯くまで顯著なる地位を得るに至らしめたるはウェストにあらずマルサス及リカルドの責任に歸す可きものなり

五。茲に云ふウェストの書とは千八百十五年に公けにしたる左の小册子なり。

Essay on the application of capital to Land, with observations shewing the impolicy of any great restriction of the importation of corn and that the bounty of 1688 did not lower the price of it. By a Fellow of University College, Oxford.

「土地に對する資本の采用に就ての考附たり穀物の輸入を甚だしく制限するの不可なる

理由及千六百八十八年制定の奬勵金は穀價を低下せしめざりしことに就ての觀察』

而してキアナンの云ふ鄭重なる引照とはリカルド序文中の左の一句なり。

In 1815, Mr. Malthus, in his "Inquiry into the nature and progress of Rent," and a Fellow of University College, Oxford, in his "Essay on the application of Capital to Land," presented to the world, nearly at the same moment, the true doctrine of rent; without a knowledge of which, it is impossible to understand the effect of the progress of wealth on profits and wages, or to trace satisfactorily the influence of taxation on different classes of the community; particularly when the commodities taxed are the productions immediately derived from the surface of the earth.

千八百十五年にマルサス氏は其著『地代の性質及進歩』に於て、オクスフォードのユニヴァーシテー・コレヂの一校友と署名せる人（ウエスト）は其『土地に對する資本の充用に就ての考』に於て、殆んど時を同じて、地代に關する眞正なる學理を世界に示したり。之を知らざれば富の進歩の利潤及勞銀に於ける作用を了解する能はず、又租稅の社會各階級に及ぼす影響を滿足に究むること能はず、殊に課稅物件が直接に土地の表面より得る生産物なるとき然り。

此書單にオクスフォードの『ユニヴァーシテー・コレヂ』校友とのみ署名し著者の名を顯さず。此書は近頃マルサスの Nature and progress of Rent と同じく米國ジョンス・ホプキンス大學助教授ホランダー A Reprint of Economic Tracts なる叢書中に收めて重刊せるものありて、誰人も容易に一讀し得る便あり。全篇僅かに五十四頁より成る。

抑も土地に收穫遞減の傾向あるを唱へ出したるは佛國の學者チュルゴーなることは、マーシアルも脚註中に明言する所なり。然れども、キアナンの言ふ如く、是は後世の學說の發展に殆んど何等の影響を及ぼすことなくして已めり。故に右掲げるウエストの小册子こそ收穫遞減の法則を學理として建設したる最初の書と目す可きものなれ。而して此書を出版したるウエストの趣意は、其年の英國議會に於て正さに制定せんとする穀法に過重なる保護的穀價を輸入許可價と定むることなからしめむ爲め、穀價の人爲的引上げの害あるを切論して、議員及輿論の反省を促さんとするにありき。

ウエスト自ら其著の卷頭に云つて曰く、

The chief object of this essay is the publication of a principle in political economy, which occurred

F. I, 39.

to me some years ago; and which appears to me to solve many difficulties in the science, which I am at a loss otherwise to explain.

On reading lately the reports of the Corn Committees ("Report from the Select Committee on petitions relating to the Corn Laws of this Kingdom; together with the Minutes of Evidence, and an Appendix of Accounts. Ordered, by The House of Commons, to be printed, 26 July, 1814"), I found my opinion respecting the existence of this principle confirmed by many of the witnesses, whose evidence is there detailed. This circumstance and the importance of the principle to a correct understanding of many parts of the corn question, have induced me to hazard this publication before the meeting of parliament, though in a much less perfect shape than I think it would have assumed had I been less limited in point of time. I shall first proceed to prove this principle and shall then shew some of the consequences which flow from it. The principle is simply this, that in the progress of the improvement of cultivation the raising of rude produce becomes progressively more expensive, or, in other words, the ratio of the net produce of land to its gross produce is continually diminishing.

By the gross produce I mean, of course, the whole produce without any reference to the expense of production; by the net produce, that which remains of the gross produce after replacing the

expense of production.

In the progress of cultivation both the gross produce and the net produce must be constantly increasing; for additional expense or capital would not be laid out on land, unless it would reproduce not only sufficient to replace the capital laid out, but also some increase or profit on that capital, which increase or Profit is the net produce. But the proposition is, that every additional quantity of capital laid out produces a less proportionate return, and consequently, the larger the capital expended, the less the ratio of the profit to that capital. Thus suppose any quantity of land such that 100*l.* capital laid out on it would reproduce 120*l.* that is 20 per cent. profit, I say that a double capital viz. 200*l.* would not reproduce 240*l.* or 20 per cent. profit, but probably 230*l.* or some less sum than 240*l.* The amount of the profit would no doubt be increased, but the ratio of it to the capital would be diminished. pp. 9—10.

此の論文の主たる目的は數年前予が心付きたる經濟學上の一原則を世に公けにせんとするに在り。此原則は予の見る所にては他に說明の道なき經濟學上の多くの難問を解釋するものゝ如し。

近頃穀法準備委員の報告を讀むに、予は此報告中に詳述しある證言の多くによりて此原則の存在に關する予が宿論の確められあるを見出したり。此事情及び穀物問題の多くの部分を正しく諒解するに、此原則の必要なるとにより、予は議會召集前此の出版を敢てするに至れり。但し時間乏しき故其態は予が期する所よりは遙かに不完不備のものたるを免れず。其原則とは他にあらず、耕作改良の進程に於て總生産の收得は累進的に費用多くを要す、換言すれば、土地の純生産の其總生産に對する割合は絶へず遞減し行くものなりてふ事是なり。勿論總生産と茲に言ふは生産費に關係なく全生産を總稱するものにして、純生産とは總生産より生産費を控除したる殘額を指して云ふものなり。

耕作の進歩するに從ひ、總生産も、純生産も絶へず增加す、支出したる資本を回收するに足るのみならず、猶ほ此資本に對し增加卽ち利益を生ずるにあらざれば、餘分の費用又は資本を土地に注ぐものなかる可き理なり。此增加卽ち利益は純生産額に當るものなり。

然るに予の主張するは、支出する資本增すに從ひ、之に對する收穫の比例は減じ、從て資本多ければ多き程、資本に對する利益の割合少くなると云ふこと是れり。例へば、百磅の資本を注ぐとき百二十磅の收穫あり、卽ち利益率二割なるに、其倍額二百磅を注ぐに二百四十磅の收穫はなく、二百三十磅又は二百四十磅よりは少き其他の額の收穫あるのみにて、二割の利益なきが如きを云ふ。換言すれば、利益の額は勿論增加すれども、資本に對する其割合は減ずるなり

是によりて、英國の生産のみに食料を仰がんとする時は、勢ひ此の收穫遞減の原則の働きを早く招致し、穀價を愈々高からしむるの不利益あるを證明し、穀法の保護的傾向を幾分にても防止せんとすること卽ちウエストの眞意なりしなり。初より單純なる一の純理的原則として主張せしものにあらず。此事情は收穫遞減の法則の功過を論ずるに方つて必ず考慮の外に置く可からず。一片の純理論なれば、其理論上の價値のみによりて、直に採否を決定するを得可けむ。實際上の必要に基きて起れるものは、必ずしも然る能はず、簡單なる一の法則の中に複雜重要なる歴史的發展の含まるればなり。蓋し一片の理法として見るときは、收穫遞減の法則は、餘りに常識的、餘りに平々凡々にして、殆んど之を學理論中に收容す可き價値なきが如し。然るに穀價の騰貴は人口の增殖と最も密接なる關係を有し、マルサスの人口論に於ける人口過超の憂は、人爲の輸入制限により收穫遞

減の作用を早からしめ從て穀價を高からしむることは亦必ずしも一片の杞憂たるに止るものにあらず。げに『收穫遞減』『人口過超』『地代の騰貴』てふ正統派經濟學上の三大問題は皆十九世紀初頭の英國特有の國情、卽ち英佛戰後に於ける英國地主の敵國穀物の輸入制限の政策の下に於て發生したるものにして、此事情に照し見て始めて眞の意味を成すものなり。穀法廢止後自由貿易の世となりては、此事情は全然一變したるに猶舊き理論を其儘襲踏したればこそ弊害を生じたるなれ、其唱道せられたる當時に於ては此等皆十分に存在の論據を有したるものなることこそ必ず記憶せざる可からず。

マルサスはウェストと殆んど同時に收穫遞減の作用を公唱せり。卽ちウェストの書と同年なる千八百十五年に公けにしたる

Grounds of an opinion on the policy of restricting the importation of foreign corn, intended as an appendix to "Observations on the Corn Laws."

(此書はアンシャンゼー兩氏主幹の『內外古今經濟論集』第六册に獨逸文に譯したるもの收めあり)

及び同じ年出版の

An inquiry into the nature and progress of rent, and the principle by which it is regulated.

(此書は右論集中に獨譯あり、原文はホランズーの『レアリント』中にも收めあり)

の二書に於て之を見るを得るなり。今後者より左の一節を揭げて之を示さん。

I have no hesitation in stating that, independently of irregularities in the currency of a country, and other temporary and accidental circumstances, the cause of the high comparative money price of corn is its high comparative real price, or the greater quantity of capital and labour which must be employed to produce it: and that the reason why the real price of corn is higher and continually rising in countries which are already rich, and still advancing in prosperity and population, is to be found in the necessity of resorting constantly to poorer land—to machines, which require a greater expenditure to work them—and which consequently occasion each fresh addition to the raw produce of the country to be purchased at a greater cost—in short, it is to be found in the important truth that corn, in a *progressive country*, is sold at the price necessary to yield the actual supply; and that, as this supply becomes more and more difficult, the price rises in proportion. Original p. 40—41.

Reprint p. 35—6. Deutsch. S. 63.

予は次の如く言ふを憚からず。一國の幣制の不規律其他一時的偶發的事情を外にして、穀物の比較的貨幣價格高きは其比較的の實際價格の高きによる。換言すれば之を生産するに用らるゝ資本と勞働の量多きが爲めなり。而して穀物の實際價格が富裕にして、繁榮と人口との增進する國に於て高く、又絶えず騰貴しつゝある所以は、絶へずより貧しき土地を耕し餘分の費用を要する機械を用ゆるの必要に迫らるゝによる。是によりて國の總生産額の增加は益々高き費用を要するに至る。卽ち進歩的國に於ては、穀物は實際の供給を招致するに必要なる價に於て賣らるゝものにして、此の供給が漸次困難を加ふるに從ひ、價格は之に應じて騰貴するなり

リカルドはウエスト、マルサス兩人の右說を繼承し更らに之を布演したるものなることは、前に引照せる序文の一節に自ら明言する所なり。然るに後世收穫遞減の法則は殆んごリカルドの創說に係るものゝ如く認めらる。リカルドの說に對してケリー其他の學者が種々の議論を試みたる是亦其當時其場合に於ては相應の理由ありたるものなれごも、今日に於て其等詳細の點を繰返へすは理論の上にも實際の上にも殆んご寸益なき無用の業と云はざるを得ず。予が本文に於てマ氏のリカルド辯護論、ケリー評論等を悉く省略に附したるは、此理由によるものなり。

* * * * * * *

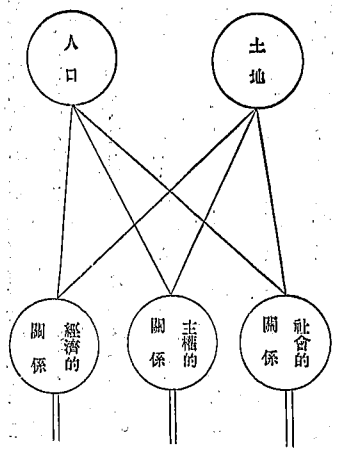
本章參考書は本文補論等に引用したるもの殊にキアナンの著書を看る可し。

第五章　人口の法則

人口の問題は經濟學の書何れも之を論ぜざるはなし。然れごも之を論ずるに如何なる觀察點よりす可きや學者の立場甚だ明瞭ならず。近來稍々流行の組織的立場より立論するものにありては、人口は國民經濟の要素の一として考究す可しとすると、粗々異論なきものゝ如し。卽ち、シュモラーは、土地、人民、技術の三を以て『國民經濟の要素』なり

とし、セリグマンは自然包圍と人口との二を以て『經濟生活の基礎』なりと說く。其他の學者にありては、土地と人口とは必ず之を要素とすること、一般にして、異論の存するは、第三以下の要素に關するのみ。經濟行爲の立場より觀察する舊來の通說に於ては、土地と人口とは、生産の二要素と認められて異議を容るゝことなく、唯第三の要素として、資本を算入す可きや否や、又更らに第四第五の生産要素を認む可きや否やに關してのみ學者見る所を異にするなり。新派の學者が國民經濟若くは經濟生活の要素と稱するは、舊說の生産要素を言換へたるに過ぎざること前既に述べたり。一は靜態の觀察を主とし、他は動態の觀察を主とするが故に、『要素』の地位に就て斯く異れる名辭を附すと雖も、其趣意の存する所に至つては、多く懸隔する所あるを見ざるなり。然るに國民經濟乃至經濟生活の要素と云ふときは、單に生産增進の原因として土地若くは人口の增殖を論ずること舊說の如くにては、不足不備の感起るを免れず。人口其のものに就て、又た單に動態（增減）のみならず、靜態（分布疎密等）に就いても考究するを要するは寧ろ當然なり。茲に於て最時の人口增減論（主として增殖論なり。マーシアルは其第四章に題して、Growth of population『人口の增殖』と云ふ）は擴張せられて、人口に關する一般的叙述となり、人口統計の大要全部經濟原論中に收容せられんとする傾向起る。セリグマンの新著の如きは著しく此新傾向を代表するものと云ふ可し。然るに斯く人口論の範圍を擴張するときは、經濟學の人口論と、統計學の人口論乃至所謂民勢學（デモクラフキー又はデモロジー）とは、殆んど相分つ所なきに至る。土地に就ても、單に供給の働因、生産の一要素として見るのみならず、汎く一般に土地に就て論究せんとの傾向稍々起りて、地理、地文、若くは土壤論地質學までをも經濟學に收拾し來らざる可からざるに至れり、シュモラーの原論の如きは明かに此趨勢に因はれたるものなり。斯くして、經濟學は一定の統一的知識より成る一科獨立の學問たる性質を失ひ、軈て『ポリヒストリー』の班に落ちんとす。抑も國民經濟（若くは經濟生活）の要素として、土地と人口とを擧ぐるは、土地人口其ものを以て、國民經濟に特有なる要素を成すとの意なる可からず。苟くも人集りて社會を成し、國を建て、一定の秩序的生活を營む以上は、土地と人口との兩者が缺く可からざる要素なることは言を俟たざる所にして、社會國家の概念亦た土地人民なる二要素

を缺く可きにあらず。唯此二要素を結合す可き第三以下の要素あるありて、茲に始めて土地と人口とは或は社會其もの、要素と認められ、或は國家の要素と認められ、或は國民經濟の要素と認めらるゝなり。直下に土地と人口と其ものに就てのみ之を見るときは、兩者は此等の限定を超越する與定事件なり、其何れかに特占せらる可き部分現象にあらず。今試みに此理を圖解すれば左の如くならん。

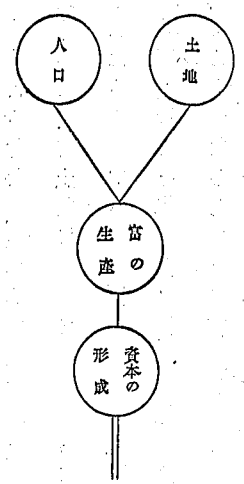


社會の要素

國家の要素

國民經濟の要素

茲に謂ふ經濟的關係とは如何なるものなりや、土地と人口とが國民經濟の要素となる可く、之を結合する要素とは何なりや。新說に於ても、舊說に於ても、此點明確なる解釋あるを見ず。唯舊說は新說よりも漠然たること稍々少しと云ふ差あるのみ。蓋し舊說に於ては、土地も人口も共に之れを活動の要因、供給增加の要件卽ち生産の要素として論ずるものにして、組織體の要素なりと云はず。其活動は、富の生産てふ限局せられたる活動なり。今其意を推して云ふときは、舊說は



生産三要素

と觀察するものなり。其說の當否は姑く措き、立論の趣稍々系統あり、憑據ありと認む可し。之に反し、新說に於ては、セリグマンの如く、第三以下の要素を加へず、單に土地と人口とのみを經濟生活の基礎なりと說くものあり、シュモラーの如く、稍々新案を試みて、技術

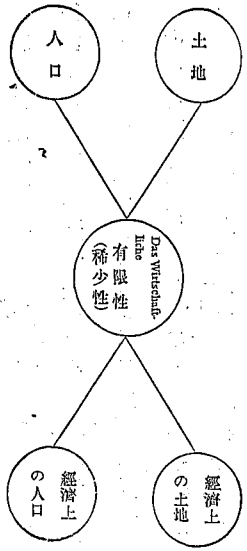
を以て此兩者を結合する第三の要素と見るものあり、或は組織論の立場に立ち乍ら、資本を以て第三の要素とし、之に國家・文化の如きを第四・第五の要素として附加せんと欲するものあり、諸說紛々定まる所を見ず。是れ畢竟標榜のみ徒らに新しくして、內容は舊說襲踏以外多く改まる所なき、根本的缺陷の致す所なりと云ふ可し。

抑も經濟學に於て土地と人口とを論ずるに至れるは、理論上の必要よりも、實際上の必要に促されたるものならずんばあらず。土地の經濟論は延長論にあらず、豐度論にあらずして、收穫遞減論こそ其眼目なれ、而して此は十九世紀初葉に於ける英國特殊の國情之を促がしたるものなること既に言へる所なり。今人口に就ても亦然り。否土地收穫遞減の法則を考究せしむるに至れると同一の事情こそ、土地の收穫によりて養はる可き人口の問題、殊に其增殖の原則の考究を餘義なくしたるなり（但しマルサスの人口論は收穫遞減論に先つて起れるものなり、而も彼の人口の法則が斯學に重きを爲せるは、彼が後年に於て自らも心付き、又リカルド等によりて更らに完成せられたる收穫遞減論あるが爲なり。兩者其一を離れては、殆んど何等の意味を成さず、此點近來の學者多く之を說かず）。然るに歷史的研究を呼號する新派の學者、却て此の歷史的沿革を無視し、人口論を爲すに其發生の事情を全く度外に置くは、自家撞着と云はざるを得ず。而して其結果は重大なり。一定の關係に於て說く經濟學上の人口論を此關係より切斷する結果、其論單に漠然たる一般の人口統計論と成り、民勢學と成り、終に何等獨立の價値を有せざる贅辯に化し了る。予は斷じて此新傾向に追從する能はず。世上一派の學者あり、經濟學の社會的科學たる地位に疑を挾みて曰く、經濟學に於て、法則と稱せらるゝものに、全然社會現象の法則たらずして、單に自然界の法則を社會事情に適應して言表はすに過ぎざるものあり、收穫遞減の法則の如き其適例なりと。然り、今の新派の學者の說の如くんば、此の疑は正しき論據の上に立つものなり。然れども前章云へる如く、自然現象の觀察に基きて立論せる收穫遞減の法則は、他に人口增殖の問題ありて、穀價高低の問題の基礎となり、而して當時英國に於て最も重大の政治問題たりし穀法贊否論の出立點として斯學に入り來りたればこそ、斯く重要の理論と看做さるゝに至りたるなれ。此事情を外にして見るときは、抑も收穫遞減の法則の如きは、詮ずる所常識論の範圍を多く出づるものにあらず。

又た元より社會現象としての經濟生活の上に左まで重大なる發見と云ふ可きものにあらず。人口の法則も亦た然り。經濟學上の人口論は、收穫遞減の法則と關連し、又た英國當時特殊の國情と照應してこそ意味を成すものにして、收穫遞減の法則と人口の法則とは、一他を離れては、到底考へ定む可からざるものなり。而して、マルサス及リカルド兩學者の名は此兩法則に關連し、此兩問題の立脚地より見るときは、永久に絶つ可からず、忘る可からざるものなり。後の學者二人者を評論する斷じて此事情を度外に置く可からず。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

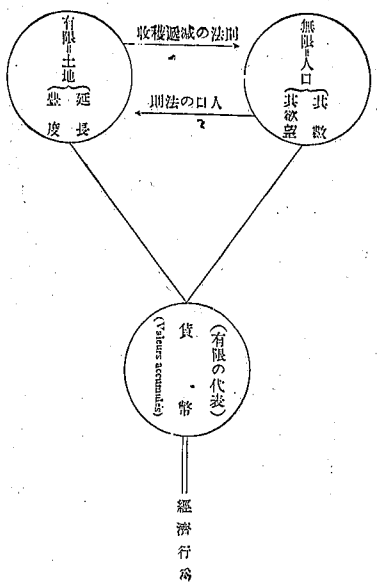
舊派の學者は勿論之を襲踏する新派の學者皆所謂『經濟の本則』なるものを說く。曰く、最小の勞働を以て最大の効果を收むと。曰く『經濟的』とは、『有限』と云ふことと同一義なりと。(前段五六六―七頁引照せるコーンの說を參照せよ)。曰く、經濟上の價値は、人の欲望無限にして之を充足する資料限あるより起る、曰く、價値は物の稀少性に根柢を有す云々。今此等の意を推して考ふるときは、



となりて、予が曩きに漠然『經濟的關係』と云へるもの稍々明らかに限局せらるゝを得可し。新派の學者の此點に關する見解如何は、別問題として、舊說に於て、土地と人口とを論ずる眞意は、稍此れによりて窺ひ知る可きが如し。更らに少しく詳說せんか、土地は極めて有限にして、人口は殆んど無限に增殖する傾向を有す。茲に於て此の有限と彼の無限とを調和するの要起る。『經濟』とは卽ち其調和の方法なり。有限の土地を支配する根本原則は收穫遞減の法則なり、無限の人口增殖を支配する原則は卽ちマルサスの發見せりと稱する所謂"Principle of population"『人口の法則』(此語に特別の意味あることは、ボーナー、キアナン兩氏共に論じて餘蘊なし)是れなり。故に凡ての經濟現象研究は、先づ

F. I, 40.

兩法則の考究を以て始む可し。土地と人口とが最根本的なる生産要素とせらるゝ所以茲に在り。土地人口の兩要素が各全く相反對する二個の原則によりて支配せらるゝにより、有限を以て無限に充てんとする人間の『經濟的活動』茲に意味あるものと成る。兩者均しく有限なるか、均しく無限なるか、經濟經濟的活動（經濟行爲）の大部分は存在の理由を失ふ。予が前編欲望論に於て、欲望無限の原則あり、又有限の原則ありと云へるもの此意を要言したるに過ぎず。人は數に於て絶へず增殖し、而して其欲望は絶へず向上し、增進す。是れ欲望無限の法則の起る所以なり。而も經濟生活に現はれて要用を惹起す欲望は、目的を前提し、結果を動機とする Zweckbedürfnis (Bedarf) 目的欲望（要用）なり。然るに此目的欲望の目的對象は、先づ其最重要の根柢たる土地に於て極めて有限なり。茲に於て經濟的活動の動源たる欲望は、此對象の爲めに限局せられて、有限ならざるを得ず。欲望有限の原則茲に於てか生ず。而して貨幣とは、此の有限性の具象なり。經濟行爲とは貨幣の秤量を以て其範圍を限定す可きものなりと予が繰返して說くの眞意茲に於て明瞭なるを得可きか。今試に此理を明かにせむ爲め圖解を下さば、左の如くなる可し。



（古派の資本と稱するものは、其實貨幣價値に測らるゝものとの意なり、猶ほ資本を Valeurs accumulés とすることは後段解說す）

然れば、今本章の問題たる人口の增殖に關する理論は、人口統計學民勢學に於けるものと、全然其着眼點を異にするものならざる可からず。人口增殖の理論は、單純なる計算の問題にあらず、また數量の研究にあらず、欲望無限の原則の一作用として考究す可きものな

り。土地は凡ての有限を代表し、人口は凡ての無限を代表す。マルサスの『人口の法則』を評論せんとするもの、先づ眼を茲に着けざる可からず、單純なる人口理論統計論を以て之を目するものは、抑も學説發展の大勢を無視するものなり。

*　*　*　*　*　*　*

扨て經濟學に於ける人口論は皆マルサスの人口に關する學説を以て出立點と爲す。マルサス人口論の骨子は彼自らの言を以て云ば左の三點に在り。

1. Population is necessarily limited by the means of subsistence.

2. Population invariably increases, where the means of subsistence increase, unless prevented by some very powerful and obvious checks.

3. These checks, and the checks which repress the superior power of population, and keep its effects on a level with the means of subsistence, are all resolvable into moral restraint, vice, and misery.

Malthus, An Essay on the principle of population or a view of its past and present effects on human happiness with an inquiry into our prospects respecting the future removal or mitigation of the evils which it occasions. 7 th edition. London 1872. Reeves & Turet pp. 12—3

又は Parallel chapters from the first and second editions of an Essay on the principle of population. (Economic Classics, edited by Ashley). London 1895. p. 96.

I、人口は必然的に生存の資料（食料）によりて制限せらる、

II、生存の資料増す處に於ては、或は甚だ有力にして顯著なる抑制によりて妨げられざる限り、人口は必ず増殖す、

III、此等の抑制並に人口の勝れたる力を壓抑し其作用を生存資料と相和せしむる凡ての抑制は、之を分て道德的抑制・罪惡及窮困の三と爲すを得。

此三條を主張するに就ては、マルサスは

The constant tendency in all animated life to increase beyond the nourishment prepared for it.

p.2. Parallel Chapters. p. 78.

總ての生物は之に向て具くらるゝ食料以上に増加する傾向を有す

との前提を置くなり。彼は其書の第一版に於て左の如く明言せり。

I think I may fairly make two postulata.

First, That food is necessary to the existence of man.

Secondly, That the passion between the sexes is necessary, and will remain nearly in its present state. Parallel chapters. p. 6.

予は信ず予は次の二個の前提を認めざる能はざるを

I、食料は人の生存に必要なり

II、両性間の性慾は必要にして又た殆んど現狀を維持すべし

而して食料増加の割合は等差的にして人口増加の割合は等比的なりと謂へるは人の皆な知る所の如し。曰く、

That population has this constant tendency to increase beyond the means of subsistence, and that it is kept to its necessary level by these causes, will sufficiently appear from a review of the different state of society in which man has existed. But, before we proceed to this review, the subject will perhaps be seen in a clearer light, if we endeavour to ascertain what would be the natural increase of population, if left to exert itself with perfect freedom; and what might be expected to be the rate of increase in the productions of the earth, under the most favourable circumstances of human industry.

*　*　*　*　*　*　*

In the northern states of America, where the means of subsistence have been more ample, the manners of the people more pure, and the checks to early marriages fewer, than in any of the modern states of Europe, the population has been found to double itself, for above a century and a half successively, in less than twenty-five years.

*　*　*　*　*　*　*

According to a table of Euler, calculated on a mortality of 1 in 36, if the births be to the deaths in the proportion of 3 to 1, the period of doubling will be only twelve years and four-fifths.

Sir William Petty supposes a doubling possible in so short a time as ten years.

But, to be perfectly sure that we are far within the truth, we will take the slowest of these rates of increase, a rate in which all concurring testimonies agree, and which has been repeatedly asccertained to be from procreation only.

It may safely be pronounced, therefore, that population, when unchecked, goes on doubling itself every twenty-five years, or increases in a geometrical ratio.

*　*　*　*　*　*

If it be allowed that by the best possible policy, and great encouragements to agriculture, the average produce of the island could be doubled in the first twenty-five years, it will be allowing, probably, a greater increase than could with reason be expected.

*　*　*　*　*　*　*

It may be fairly pronounced, therefore, that, considering the present average state of the earth, the means of subsistence, under circumstances the most favourable to human industry, could not possibly be made to increase faster than in an arithmetical ratio.

*　*　*　*　*　*　*

Taking the whole earth, instead of this island, emigration would of course be excluded; and, supposing the present population equal to a thousand millions, the human species would increase as the numbers 1, 2, 4, 8, 16, 32, 64, 128, 256; and subsistence as 1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 8, 9. In two centuries the population would be to the means of subsistence as 256 to 9; in three centuriesas 4096 to 13, and in two thousand years the difference would be almost incalculable.

In this supposition no limits whatever are placed to the produce of the earth. It may increase for ever, and be greater than any assignable quantity; yet still the power of population being in every period so much superior, the increase of the human species can only be kept down to the level of the means of subsistence by the constant operation of the strong law of necessity, acting as a check upon the greater power. Bk. I. ch. i pp. 2—6

人口は斯く生存資料以上に増加す可き絶くさる傾向を有し又此等の原因によりて必要なる水平に保たるゝことは人類が經過せる社會の各種の狀態を一覽するによりて充分に知るを得可きなり。今此點に向て論歩を進むるに先ち人口が完全なる増加の自由を有するときは其自然的増加の程度如何并に人類産業の最も便宜なる事情の下に於ては地球の生産増加の割合如何程なる可きやを確むるときは此問題の本質一層明瞭なるを得べし。

*　*　*　*　*　*　*

米國北部諸洲は歐洲の近世諸國よりも生存の資料より豊富人民の風俗より純潔にして

早婚の制限より少し。而して人口は一世紀半の間連續的に毎二十五年以内に於て二倍するを見るなり。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

ユーラーの表によれば、死亡率は人口三十六に對する一にして、出産數と死亡數との割合三對一なるときは、人口二倍に要する時間は僅かに十二年五分の四なり。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

サー・ウヰリアム・ペテーは人口は僅々十年にして二倍するを得可しと推測せり。然れども事實に近きを確かにせん爲、吾人は凡ての證言の一致し、且つ出生よりのみ來ること繰返して確められたる最緩の增加率を取りて論ぜん。

即ち人口は制限を被ることなきときは、毎二十五年に二倍しつゝ行く、即ち等比的に增加すと斷言して差支へなかる可し。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

出來得る限り最良の政策を執り並に農業に大なる奬勵を與ふるにより、英國の平均生産額を始めの二十五年に二倍するものを得るものと想像せんか、此は正當に期待し得る以上の增加なる可し。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

地球現在の平均狀態に就て見るときは、人類産業に最も便宜なる事情の下に於て、生存の資料は等差的以上の割合にて增加することは望む可からずと斷言し得る。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

今英國に代へて全地球を例に取るときは、移出民の問題は無論消滅す可し、而して全地球の人口總數を假りに十億とするとき、人類增加の割合は一・二・四・八・十六・三十二・六十四・百二十八・二百五十六なる可く、食料の增加は一・二・三・四・五・六・七・八・九に過ぎざるべし。即ち二世紀の後には人口二百五十六に對し食料は僅かに九にして、三世紀の後には四千九十六に對する十三となる可く、二千年の後には其の懸隔は殆んど不可算的なる可し。

以上の推定を爲すに方り、吾人は地球の生産に限度を設けず、即ち地産は永遠に增加し

得るものにして定理を以て表はし得る以上たり得る前提せり。而も人口の力は常に食料よりも優勢にして人口増加の大勢は此優力に對する制限たる『必要』の大則の絶くざる働きあるによりてのみ人口の増加は食料の水準に引止められ得るものなり。

而して斯く人口と食料との増加を調和する制限に種々あり。即ち客觀の側より云へば其制限は積極的制限と豫防的制限とに分れ主觀の側より云へば罪惡窮困及道德的抑制の三に分る。

These checks to population, which are constantly operating with more or less force in every society, and keep down the number to the level of the means of subsistence, may be classed under two general heads—the preventive and the positive checks.

The preventive check, so far as it is voluntary, is peculiar to man, and arises from that distinctive superiority in his reasoning faculties, which enables him to calculate distant consequences. The checks to the indefinite increase of plants and irrational animals are all either positive or, if preventive, involuntary. Bk. I. ch. ii. 8th Ed. P.7. Parallel Chapters. p. 87.

凡ての社會に於て多少の力を以て絶へず働き食料と同程度に人口數を維持する諸制限は大則として豫防的積極的の二に爲すを得可し。豫防的制限は其が任意たる限りは人類にのみ特有なるものにして人類の理性の著へ秀づる爲め遠き將來の結果を慮るより起る。植物及理性を有せざる動物の無限增加に對する制限は積極的なるか若へは豫防的なりとせば其は不任意的なり

主觀の方面より見たる制限に就ては曰へ

On examining these obstacles to the increase of population which are classed under the heads of preventive and positive checks, it will appear that they are all resolvable into moral restraint, vice, and misery.

Of the preventive checks, the restraint from marriage which is not followed by irregular gratification smay properly be termed moral restraint.

Promiscuous intercourse, unnatural passions, violations, of the marriage bed, and improper arts to conceal the consequences of irregular connections are preventive checks that clearly come under the head of vice.

Of the positive checks, those which appear to arise unavoidably from the laws of nature, may be

called exclusively misery; and those which we obviously bring upon ourselves, such as wars, excesses, and many others which it would be in our power to avoid, are of a mixed nature, They are brought upon us by vice, and their consequences are misery. Parallel Chapters. p. 90. 8th Edition p. 8-9.

以上積極的豫防的の二に分ちたる人口の制限を精査するときは、又分れて道德的抑制罪惡及窮困の三となるを見る可し。豫防的制限にして伴ふに不規則なる追樂を以てせざる婚姻よりの抑制こそ適當に道德的抑制と云ふ可きものなれ。亂雜なる性交・不自然的慾情・婚床の亂用其他不規則的結合の結果を掩はんとする種々の不當なる方法は豫防的制限にして罪惡の項に屬す可きものなり。自然の大則より不可避的に起る積極的制限は悉く窮困に屬す。吾人自ら之を招く戰爭・亂行其他凡て避け得可きものは罪惡と窮困と混合す。其起る所に就て見れば罪惡たり、其結果に就て見れば窮困なり。

今右の意を表示して諒解に便ならしめん（參考の爲め第一版の說をも示めす）。

第一版の說

- 客觀的
  - 積極的抑制
  - 豫防的抑制
- 主觀的
  - 窮困
  - 罪惡

第二版以後の說

- 客觀的
  - 人口增加の抑制
    - 積極的抑制
      - 避く可からざるもの
      - 避け得可きもの
        - 結果 — 窮困
        - 原因 — 罪惡
    - 豫防的抑制
      - 不正行爲の伴ふもの
      - 不正行爲の伴はざるもの
- 主觀的
  - 道德的抑制

右の分類に就て世上謬傳あり、積極的制限は窮困と罪惡とより成り、豫防的制限は道德的抑制と全然同一なりとする是れなり。斯くては三の區分は二の區分の小區分たらんのみ。マルサスの意は然らず、二の區分と三の區分とは異れる方面より見たる異れる二個の獨立せる分類なりと爲すにあり。此點はボーナー之れを明白に辯ぜり。曰く、

We have here a twofold alongside of a threefold division of the checks to population. The division of checks into positive and preventive has regard simply to the outward facts. The division of them into vice, misery, and moral restraint has regard to the human agent and his inward condition, the

state of his feelings and of his will.——Bonar, Malthus and his Work. p. 81.

人口の制限は二分法と三分法を併立す。積極的・豫防的の區分は單に外形の事實に就て施せるものなり。罪惡・窮困・道德的抑制の區分は人間と其内界の事情其の感情其意思の狀態に就て施せるものなり

然るにゼリグマンの如きすら猶流行の謬說に陷れり。曰く

This pressure of population on food, unless removed by preventive agencies, will lead to the positive checks of misery, vice and crime……p. 61.

人口の食料に對する壓迫は豫防的制限によりて除去せられざるときは窮困・罪惡及犯罪てふ積極的制限を招致す

と。之に反して師は正しき見解を下せり。曰く

Diese Ausgleichung könne in doppelter Weise erfolgen: entweder praeventiv——so dass mam eine überschüssige Bevölkerung gar nicht entstehen lässe——oder positiv (repressiv), so dass die entstandene auf irgend eine Weise wieder weggeschaft werde. Der allgemeine Ausdruck für die Macht, durch welche das letztere geschehe, sei das Elend. Das erstere aber könne sowohl durch lasterhafte Lebensweise und ihre Folgen als auch durch moralische Enthaltsamkeit erreicht werden. Elend, Laster und moralische Enthaltsamkeit, das seien die drei Hebel, welche das Gleichgewicht zwischen Menschenzahl und Nahrungsmitteln immer wieder aufrecht erhielten. Brentano, Die Malthussche Lehre und die Bevölkerungsbewegung der letzten Dezennien. München 1909. S. 569.

此調和は三樣の方法によりて行はる。一は豫防的卽ち過剩の人口を始より生ぜしめざるを云ふ。一は積極的（壓抑的）卽ち生じたる過剩の人口を何等かの方法にて除き去るを云ふ。後者の行はるゝ力を一般に名けて窮困と云ふ。前者には不道德的行爲及其結果によるものと道德的抑制によるものとあり。卽ち窮困・罪惡・道德的抑制の三は人口數と食料との權衡を保つ方法なり

マルサスが斯く客觀的に二制限をあげ主觀的には三方法をあげたるは千八百三年の第二版以後の說にして其始めて人口論を公けにしたるときは『道德的抑制』は毫も之を論ぜざりしなり。卽ち第一版に於ては罪惡と窮困とのみを擧げたり。然るに第二版以後に至りては此兩者よりも道德的抑制なるものに重きを置くに至れるは彼が學說の

F. I, 41.

發展に於て看過す可からざる變遷なり。ブレンタノ師曰く

In der ersten Auflage seines Versuches waren es, wenn nicht ausschliesslich, so doch nahezu ausschliesslich Laster und Elend, welche die Ausgleichung zwischen Zunahme der Nahrungsmittel und Zunahme der Bevölkerung bewirkten. Es mag eine Folge der erwähnten Korrespondenz mit Godwin sein, der sich hiegegen wandte, dass in den späteren Auflagen die Bedeutung des vorbeugenden Hemmnisses, der sittlichen Enthaltsamkeit mehr hervortrat. S. 570.

彼の論文の第一版に於ては、人口の增加と食料の增加との權衡を保つものは（悉くとにはあらざるも殆んど）罪惡と窮困とのみなせり。然るに第二版以後に於て豫防的制限・道德的抑制を以て重しとするに至れるは、ゴドウキンの反對に會したるが爲ならんと。此點はマルサスの人口學說の價値を判定する上に甚だ肝要なり。其故他なし、マルサスの人口論は之によりて二の明かに區別す可き論點を含むことを知るを得ればなり。二の論點とは、

一　生物無限增殖の理を闡明すること（第一版の主要論點）

二　人口は他の生物と異り、人爲的に其增殖を制限し得るものなること。從て人口の增殖は獨り自然界の現象なるのみならず、社會上の現象にして、人口の法則は社會上の法則たり得ること、並に人口の增殖は、理論の問題たるのみならず、政策の問題たり得るを明にしたること（第二版以後の主要論點）

是なり。從てマルサスの所論の價値を判定し、其當否を考察するには、此の二の異れる眼點よりするを要するなり。マルサスが始めて其人口論を唱出したる時には、專ら第一の論點の闡明に力を用ゐ、第二版以後に於ては、之に反して、第二の論點に主力を傾けたるなり。

抑もマルサスが其人口論を公けにしたるは、十八世紀の極末に於ける英國特有の國情と、之に關連して續發せる諸種の社會改良論、就中ウキリアム・ゴドウキンの『政治的正義』なる著書と密接の關係を有す。ゴドウキンは後世の無政府主義の鼻祖とも稱す可き人にして、當時英國に於ける諸種の社會上政治上の難問題は、皆現存の社會及政治組織の根本的缺陷より來れるものとなし、殊に人爲的政策を以て妄りに人民の生活を束縛する政

府を以て害惡の淵源と爲し、此等總てのものを撤去するときは、神の攝理に合せる黃金社會現出するを得可しと主張せり。マルサスの父は此說に贊同し常の如く子なるマルサスと之れを討論の題目と爲したるに、子マルサスはゴドウキンの說を一は自信より、一は父との討論上反對の立場を取る必要より盛んに駁擊し、終には討論を自己家庭の裡に止めず、其得たる思想を更らに經めて一册の匿名著述として公けにしたるもの、卽ち彼が人口論の第一版なり。さればマルサスは第一版に於ては主としてゴドウキン所論の要所を破壞せんことに主力を用ゐ、英國現在の難問は決して人爲政策又は政府の惡政の結果にあらず、人類自然の約束上免る可からざる所なりとし、其然る所以は、人口は無限に增殖するに、食料の增加之に伴はざるより、之を調和せんとて起る種々の制限が、之等の社會上政治上の害惡となりて顯はるゝものにして、之を矯正せんには人爲の制限卽ち豫防的制限を人口の增殖に加ふるによりてのみ其目的を達す可く、ゴドウキンの如く政府を廢し、人爲の政策を撤するが如きは、其病所を診するに於て全く正鵠を失せるものなりとの說を主張せんとしたるなり。故に其主力を注ぎたるは、人類無限增殖の理法の闡明にあり。

無限に增殖する人口を養ふ可き食料は、之を生産する土地の極めて有限なる爲め有限なり。茲に於てマルサスの人口の法則起る。而して自然の理法として無限に增殖す可き筈なる人口は、實際に於ては無限に增殖せず、卽ち茲に各種の制限あるを知る。而もマルサスが始めて其人口論を成したるときには、此制限も寧ろ自然的のものなりと觀察したれども、彼は其研究を進むるに從ひ、又ゴドウキン其他の反對論出づるに及んで、人爲的制限の力大なることを悟るに至れるなり。ボーナー此點を論じて曰く

In the first edition the bulk of his work consisted of an attempt to show that the necessary checks all produce vice or misery, and therefore offer an invincible obstacle to indefinite improvement. So in the second edition, which he regarded as a new work, Malthus abandoned the attempt to show that vice and misery are the only possible checks to the growth of population.

"Throughout the whole of the present work," he says in the preface, "I have so far differed in principle from the former, as to suppose another check to population possible which does not come under the head either of vice or misery."

第一版に於て彼が主力を用ゐたる所は、必然的なる制限は凡て罪惡か窮困かを生ずるも

のにして、從つて無限の進歩に對し打克ち難き妨碍を與ふる理を主張するにあり。而して彼が自ら全く新著述と認めたる第二版に至りては、マルサスは、人口增殖の制限は、罪惡と窮困とのみなりとの說を捨てたり。彼自ら其序文中に曰へり、此書の全部を通じて、予は第二版に取りたる所と主義を異にし、罪惡又は窮困の項目に屬せざる他の制限を以て可能なりとする說を採れりと

而して、マルサスが『道德的抑制』と名くるものは、單に出產を制限するの意にあらず、一切の性交より遠かることを意味するなり。彼は此兩者を明かに區別せり。卽ち曰く

It will be observed, that I here use the term *moral* in its most confined sense. By moral restraint I would be understood to mean a restraint from marriage from prudential motives, with a conduct strictly moral during the period of this restraint; and I have never intentionally deviated from this sense. When I have wished to consider the restraint from marriage unconnected with its consequences, I have either called it prudential restraint, or a part of the preventive check, of which indeed it forms the principal branch. 8th. edition. p. 8. Footnote.

予が茲に用ゆる『道德的』てふ語は、最も狹く限られたる意味に於けるものなることを注意せんとす。卽ち予が道德的抑制なる語を以て言表はさんとするものは、思慮ある動機より婚姻を抑制するに方つて、其抑制期間嚴密に道德的なる生涯を送ること是なり。予は故意に此意味より遠かりたること決して之れなし。其結果如何に關係なき婚姻よりの抑制を考察せんと欲するときには、予は、之れを思慮的抑制と名くるか、若くは、之れを豫防的抑制の一部分――其主要部分を成す――と名けたり。第八版第八頁脚註。

換言すれば、出產制限の目的を以つて、而して嚴密に道德的生涯を送りつゝ、婚姻を差控へることのみを、マルサスは『道德的抑制』と名くるものにして、『其結果如何に關係なき婚姻の抑制』とは、婚姻を見合せて出產を防ぐと雖も、其結果嚴密なる道德的生涯を送らず、不道德なる性交を繼續しつゝ、人爲的產兒制限によつて、出產防止の方法を講ずるが如きもの（彼はそれを不規則的結合の結果を掩はんとする不當なる手段と呼べり）を意味するものにして、彼は、明らかに之れを道德的抑制と認めず、單に思慮的抑制若しくは豫防的抑制の一部と看做すなり。マルサス主義の名の下に、產兒制限を主張するが如きは、マルサスの極端に意外とする所にして、彼を地下より起して、此事を聞かしめば、彼は必ず

や決然として其非を痛擊す可きこと疑なし。更らに婚姻生活中に於ける產兒制限も、マルサスは之を『婚床の亂用』の名の下に明かに罪惡の項に歸す可きものとしたり。

マルサスは其第二版に至りて第三の制限方法として此の嚴格なる意味に於ける道德的抑制の可能否有力なる可きを認むるに至り其立論の趣きは著しく變じたり。初めの說は自然の大勢不可抗の理を主眼とし後の說は人爲により人間の德行によりて之と調和す可き實行の必要を要旨とす。後のマルサスを論ずるもの此の區別を辨へずして其說を評論するが爲め多く無用の辯に陷れり。キアナン故に曰く、

It is in great measure the result of this change between the first and the later editions that the soundest economists will hesitate if asked directly, "What is the principle of population as understood by Malthus?" p. 136.

最も眞面目なる經濟學者が『マルサスの說きたる人口の法則とは何ぞや』と直下に質問せられたるとき答に躊躇するは、大部分第一版と其後の版との間に此變化起れる結果なり

と。マルサス人口論の『誤謬』を指摘する學者其數甚だ多し。而も其所謂誤謬なるものがマルサスの誤謬に非ずして、却て論者の誤謬たらざるを得るもの克く幾干かある。キアナンの言誠に中れり。

今マーシアルの本章に於けるマルサス評論は此謗を被る可きものにあらず。マーシアルはマルサス人口論の要點は

一　勞働の供給に關する說。卽ち人口無限增殖の傾向

二　勞働の需要に關する說。食料を天然が勞働に對する需要と見る

三　人口の將來に關する說。卽ち人口過超の憂

なりとせり。而して一に關する說は今日に於ても大體に於て眞理たるを失はず、三に關してはマルサスの豫測せざる多くの事件其後に起りて論據を失はしめたりと云ふ。予も亦粗々爾く信ずるものなり。詳しく云へば、彼が說の一は大體に於て打破し難き眞理を傳ふるも、其三の人口政策に關する所論は今日に於ては寧ろ反對の事實を認めざる可からずと信ず。否彼が生物無限增殖の法則を唱出したるは獨り經濟學の上のみならず

凡ての學問の上に永久に沒す可からざる大功業なり。然るに此點に於て彼の誤謬を見出さんとするもの其類尠からず。今其凡てを擧げて評騰するは到底煩に堪へず。獨り師ブレンタノ先生のマルサス評論に於て彼が誤なりと指摘せられたるもの甚だ有力なり。曰く第一の誤は統計上にあり、彼が二十五年を以て人口倍加すと爲せる是れなり。第二の誤は心理上にあり、(甲)人類は生殖慾を有す　(乙)此慾は常住不易なりとせる是れなりと　(前掲書五百七十一・五百七十九頁)。予も亦此見解に服從せざる能はず。然れども此誤謬ありとて、彼が人類無限增殖の傾向ありてふ大體論は決して破らるゝものにあらず。倍加年限の論に於てはボーナー、キアナン兩氏も亦其謬なるを評論せり。是れ蓋し不可爭統計上の事實にして、ブレンタノ師の示したる如く　(補論附表六五八頁を見よ)　倍加年限は最も短きニュー・ジーランドに就て見るも三〇・五年にして、最も長き佛國は三一六・九メキシコは實に三四六四・一年なり。又第二の誤謬たる生殖慾常住不易の前提は、實際に於て維持し難きこと言ふまでもなし。人間は性交慾を有す、生殖慾を有せずとのブ師の論亦然るならんと思はる。而も性交慾減少の原因として、ブ師の擧げたるもの多くはマルサスの道德的抑制か又は不道德的抑制　(避姙其他)　に基くものなることは、之を知らざる可からず。卽ちブ師は

一生活準備の向上。二家族を養ふ困難。三婦人の地位の上進。四他の樂の競爭。五配遇を得るの困難

(五百八十八——九十頁)

の五を以て結婚數減少の原因なりとせり。是れマルサスの所謂道德的抑制を餘儀なくする作用に外ならず。次に出生數減少の原因としてブ師が

一生殖病。二精神病。三生殖慾の減少　(避姙等)

の三を擧げたるも、是れ何れも皆不道德的積極又は豫防制限の項目に屬す可きものにあらずして何ぞや。

予を以て見るにマルサスの誤謬は此等の點に就て如何に多くとも、其は彼が人口論の根柢を覆すの力なし。其要とする人口の增加は無限の原則を代表すてふ大眞理は炳として存す。而して土地有限の法則收穫遞減の法則が大體の傾向を示めす者にして、實際

生活に於ては其作用を遮ぎる幾多の事情存する如く、人口無限增殖の法則も實際上の活動を現前するものにあらず。吾人の見る所は人口有限增殖の事實のみ。マルサスは此點の解釋に於ては確かに幾多の誤謬に陷れること後の學者の呼號する所の如し。然れども解釋は事實にあらず。解釋正しきにせよ、誤れるにせよ、事實は卽ち事實なり。マルサスの功は正しき解釋を下したることに存せず、事實を正しく看取したることに在り。マルサスの眞の誤謬は此に存せずして他にあり。卽ち人口の將來に關する說是れなり。彼れは已れの時代に事實上存したる人口過超の傾向を以て永遠不易の傾向なりと速斷せり。是れ彼の大なる謬なり。而も彼の誤は恕し得可し。今日新マルサス主義と稱する者は、マルサスの正しき第一の說を祖述するにあらず、徹頭徹尾誤れる其第二の說を傳承する者なり。ワグナーの如き稍々此類に屬す。今日の實際に於ては、人口增加の率高きは憂ふ可きにあらず、否寧ろ喜ぶ可きなり。其低き佛國の如きこそ大に憂ふ可き狀態にありと云はざるを得ず。低き出生率、更らに著しく低き死亡率、而して其差として生ずる高き人口增加率こそ最も歡迎す可きものなることは、人口學上の不可動眞理なり。否人口增加率高きは、之を養ふの力其國に存する結果と見る可し。其低きは之を養ふの力乏しき表章なり。人口に對する需要多ければこそ其供給は增加するなれ、而して人口に對する需要多きは、其の國生産力の大なるを意味す。今日世界の現狀に於て誤り傳へられたるマルサス主義の杞憂の如きは到底容るゝの餘地なし。『生めよ殖へよ、地に充てよ、』是れ人類に對する天の命なり。人口制限政策は這箇の天理に背くものなり。人は生みて殖へて地に充たんとす、而も地は行ゞ所限あり、茲に於て人の努力生じ、向上の路拓け、進歩茲に起り、改良茲に成る。退嬰して地を狹くし、人を寡くするものは、終に滅亡を免るゝを得ず。予は斷じて新マルサス主義に與する能はざるものなり。而も新マルサス主義の杞憂は事實となり得る者なり。政策の上に建てるマルサスの此議論は、實際の政策が其前提を充たす時、事實となるは當然なり。何を以て爾か云ふ。答へて曰く、農業關稅の激增なり、保護主義の擴張なり。換言すれば、マルサス時代の英國に於ける如く、食料の供給に人爲的の制限を設くること是なり。此等の政策は確かに新マルサス主義の杞憂とする人口過剩の事實を現成す可し。何となれば、此等の政策は、有限の土地をより有限のも

のこなし、人口を養ふの力を減殺すればなり。有限の土地を以て無限の人口を養ふの必要に迫らるればこそ經濟上の進歩起りて、此間に調和を齎らすなれ。然るに人爲の政策を以て妄りに此調和を破るときは、國の土地は其人口を養ふ能はざるに至り、茲に食なき過剩の人口生ずるは當然のみ。マルサスの人口論こそ此の如き政策を謬れる所以を最も有力に明示するものなれ。此の理を忘れて徒らに『人口論の誤』を指摘して得たりこ爲す、予は斷じて同ずる能はず。人口の法則は永久の眞理なり、ダルウヰンの進化論之より出で自然現象の尋究に空前の光明を放てり。然ればまた社會現象の上に於ても、此法則を深く究めて、更らにより大なる法則の發見に導くこと、經濟學將來の任務ならずこせんや。マルサスの誤は其時代に囚はれたる點にあり、彼が說きたる根本の眞理に至りては今猶昔の如く否定す可からず覆へす可からざるなり。

第五章　補論

予は本章に於て人口論の說明を爲すに、從來の學書に普く用らるゝ方法を捨てんこ欲せり。故に人口統計に關する各種の詳述は凡て省略に附せり。マーシアルの第四章には人口增加の沿革並に人口政策の變遷、人口統計の大要等を論じたるも本章一も是を紹介せず。此等の如何なる經濟書にも大抵載せあれば、今更絮說の必要なしこ信ず。若し詳しきことを學ばんこするものあらば

G. v. Mayr, Bevölkerungsstatistik. 2. A. seit 1922.

R. Mayo-Smith, Statistics and Sociology. 1897.

〃　〃　Statistics and economics. 1899.

の三書を繙く可し。津村秀松博士國民經濟學原論及金井延博士社會經濟學にも稍々詳しき人口論あり、併せ看よ。但し津村博士の說明はマルサス說を正しく傳へず、殊に道德抑制の論を無視す。金井博士亦兩分三分の別を明ならしめず。共に惜むべし。

さてマルサスの人口論の原名は

第一版は

An Essay on the principle of population, as it affects the future improvement of society, with remarks on the speculations of Mr. Godwin, M. Condorcet, and other writers. London 1798.

「人口の法則に關する考、其が社會の將來の進歩に及す影響ゴドウヰン氏コンドルセー氏其他學者の所論に對する評論」

之に反し第二版は

An Essay on the principle of population; or, a view of its past and present effects on human happiness; with an enquiry into our prospects respecting the future removal or mitigation of the evils which it occasions. A new edition, very much enlarged. By T. R. Malthus, A. M. Fellow of Jesus College, Cambridge. London 1803.

「人口の法則に關する考、人類幸福に及す過去現在の作用、殊に之より生する弊害を將來取除くに關する吾人の案に就ての研究」

第一版と第二版との内容の相違は其書名にも顯れたるを見る可し。

マルサス評論の數は非常に多く、何れの經濟書を繙きても何等かの評論なきはなけれども、其中最も勝れたるものは本文に屢々引用せる左の二英書なり。

Bonar, Malthus and his Work. London 1885.

Cannan, Theories of Production and Distribution. (仝名書に出づ) pp. 124—147.

本書起稿中予が接手せる左書は最新のマルサス評論として必ず讀まざる可からざるものなり（本文中引用せり）。

Brentano, Die Malthussche Lehre und die Bevölkerungsbewegung der letzten Dezennien. (Abhandlungen der historischen Klasse der K. bay. Akademie der Wissenschaften. XXIV. Bd. III. Abt.) München 1909.

此書は豐富なる各種の統計表を附錄したれば、最近各國の人口狀態を知るには、マイアの統計學にも勝りて便あり。ブ師が近來續て公けにせる純理論の短篇中第一位に推す可きものならん。

今右書に附錄せる數表の中、人口倍加年數に關する表の一部を左に摘錄して參考に供す。表は右書附錄第六、七頁に收めあり。

F. I, 42.

人口倍加年數表

國名	I 調査ノ年	II 人口一萬ニ付平均出生超過數	III 算出セル倍加ニ要スル年數
1. ニユー・ジーランド	1861-1905	230	30,5
2. ニユー・サウス・ウエールス	1860-1905	216	32,4
3. ウルガイ	1882-1903	214	32,7
4. サウス・オーストラリア	1861-1905	214	32,7
5. クヰーンス・ランド	1860-1905	208	33,7
6. アルゼエンチン	1895-1905	183	38,2
7. ヴヰクトリア	1854-1905	179	39,1
8. ウエント・オーストラリア	1861-1905	173	40,4
9. タスマニア	1861-1905	172	40,6
10. ブルガリア	1881-1905	170	41,1
11. 露國（歐洲）	1871-1900	151	46,2
12. セルビア	1861-1905	142	49,1
13. 那威	1841-1905	140	49,8
14. サクセン	1841-1905	132	52,9
15. スコツトランド	1856-1905	128	54,5
16. イングランド及ウエールス	1841-1905	123	56,7
17. プロイセン	1841-1905	122	57,2
18. 丁抹	1841-1905	120	58,1
19. バーデン	1841-1900	119	58,6
20. ミシガン	1868-1902	117	59,6
21. 瑞典	1841-1902	112	62,2
22. 獨逸帝國	1841-1902	112	62,2
23. 和蘭	1841-1905	111	62,8
24. フインランド	1841-1900	107	65,1
25. ヘツセン	1841-1900	105	66,4
26. 洪匈利	1876-1905	105	66,4
27. ウルテンベルヒ	1841-1900	102	68,1
28. 白耳義	1841-1905	97	70,3
29. ルーマニア	1861-1905	96	72,5
30. 葡萄牙	1886-1900	96	72,5
31. 伊太利	1866-1905	92	75,8
32. 漢堡	1851-1900	91	76,5
33. 日本	1879-1903	88	79,1
34. バイエルン	1841-1905	84	82,9
35. 瑞西	1871-1905	83	83,8
36. 墺太利	1841-1905	79	88,0
37. マサチユーセツツ	1849-1905	76	91,5
38. エルサス・ロトリンゲン	1841-1905	73	95,2
39. コネクチカツト	1853-1903	71	98,1
40. 希臘	1864-1905	69	100,8
41. 愛蘭	1864-1883	66	105,6
42. 西班牙	1861-1870 1881-1905	64	108,6
43. ロード・アイランド	1874-1900	55	126,4
44. 智利	1880-1905	54	128,7
45. メーン	1892-1904	46	151,0
46. ヴアーモント	1871-1900	46	151,0
47. 佛國	1841-1905	22	316,9
48. メキシコ	1895-1901	2	3464,1

右表によれば英國は人口倍加に五十六年十分の七獨逸は六十二年十分の二を要し我日本は實に七十九年十分の一を要するなり。人口增加少きを以て著しき佛國に至りては三百十六年十分の九を要す。米國全體に就ての調査は之を缺くも其擧げたる中增加最も速なるミシガン洲にてすら猶ほ五十九年十分の六を要す。然れども二十五年倍加說の實際の事實たらざるこを見る可きのみ。但しマルサス時代の米國と今日の米國と同一視す可きに非ざるや言ふ迄もなし。乍去此統計を以て直ちにマルサスの誤謬を立證し得たりと思ふものあらば其は速斷の甚だしきものなり。

＊　＊　＊　＊　＊

我邦に於ける人口增殖の有樣如何なりしや其詳なるとは元より知り得可からずと雖も、故横山由清氏古書舊記に就て詳しく考證したるもの、明治十二年九月印行の學藝志林に揭げあり。題して『本朝古來戸口考』と云ふ。其後井上瑞枝氏『大日本古來人口考』一篇を物して統計學雜誌二百十三・十四兩號に載せたり（明治三十七年一月・二月刊行）。今横山氏の考へたる『全國戸口數一覽表』を左に示さん。

時代	戸数	口数
弘仁十四年	—	3,694,331
貞觀以降	188,800	3,762,000
天暦以降	176,666	4,416,650
文治以降	650,000	9,750,000
延享元年	—	25,682,220
寛延元年	—	25,917,830
寶暦六年	—	26,061,830
文化元年	—	25,621,957
明治六年	—	33,300,675

非上氏の古來人口考は甚詳密に渉るものなるが、其中合計の掲げあるものゝみを擧ぐれば左の如し。

御代	年紀（神武天皇）	人口數
崇峻天皇二年	1249	3,931,152 4,031,050 4,988,842
推古天皇十八年	1270	4,990,000 4,969,899
元正天皇養老五年	1318	4,584.893
聖武天皇		8,000,000 2,000,000
自神龜元年	1384-1408	4,899,620 8,631,074
至天平二十年	〃	4,508,551 8,631,770
嵯峨天皇弘仁四年	1473	3,694,331
淸和天皇貞觀以後 醍醐天皇延喜以前	1520 以後 1560 以前	3,762,000
醍醐天皇延長元年	1583	1,128,167
村上天皇天暦以後 一條天皇正暦以後	1610 以後 1650 以後	4,416,650
宇多天皇弘安年間	1938-1947	4,484,828
奈良天皇天文二十二年	2213	22,330,996
靈元天皇	2325-2346	24,000,000

御代	年紀（神武紀元）	人口數
東山天皇	2348-2366	24,994,606
中御門天皇 享保六年	2381	26,065,422
同 十一年	2386	26,508,998
同 十八年	2392	26,921,816
櫻町天皇 延享元年	2410	26,153,450 26,162,230 25,682,220
桃園天皇 寛延三年	2410	25,926,720 25,917,830 25,920,830
寶暦元年	2411	26,080,000
同 六年	2416	26,061,830
光格天皇 寛政四年	2452	24,891,441
同 十年	2458	25,471,033
文化元年	2464	25,621,957 25,455,842 24,417,729
仁孝天皇 文政十一年	2488	27,201,400
天保五年	2494	27,063,907 31,441,646
弘化三年	2506	26,602,110
孝明天皇 嘉永五年	2512	27,201,400
安政三年	2516	25,000,000
明治天皇 明治五年	2532	31,866,389

右兩表の數字は如何程まで信を置く可きものなりや遽かに考定し難しと雖も、多少參考に資す可きものなるは言を須たず。醍醐天皇延長元年の百餘萬を除きて、他は後宇多天皇の朝、卽ち西曆十三世紀迄の數字は皆三百萬の間を出入し獨り聖武天皇の朝に於て八百萬なる異數を載せたるのみ。されば歐洲の中古前葉に該當する時期に於ける我邦の人口數は五百萬人を超過せざりしものと見て大過なかる可きか。シュモラーの原論によれば、獨逸（今日の面積に引直して）の人口はケーザー時代には二三百萬の間、千二百五十年より千三百四十年の間には、約千二百萬、千六百二十年頃には千五百萬、千七百年頃同じく千四五百萬、千八百年には二千二百萬乃至二千四百萬なりしならんと云ふ（新版卷一第一七三頁）。我邦にても後奈良天皇の朝、卽ち十六世紀の半頃には二千二百有餘萬人とあり。其後の數字は嘗つて二千萬臺を降ることなし。天保五年の異數三千百餘萬を除ては、皆二千四五六百萬の間を出入するを見る。卽ち獨逸と比較するときは、十三世紀頃は彼の千二百萬に對して五百萬以下なれば、我邦の人口數は甚だ少きを示すも、其は面積の元より同じからざれば、疎密の比較を立て難し。十六世紀以降に至りては、面積

に於ても彼我稍同位に立つ爲めならんか、我邦の方人口多きを見る可し。先づ十九世紀初頭の獨逸人口數と十七八世紀に於ける我人口數と大約同じ如く見ゆ。元より此等の異同は邦土の廣狹を精査して考へざれば、一場の空談に過ぎざれども、亦其の間多少の消息の窺ふ可きなきにあらず。若し我邦にして右に推測する如く獨逸よりも人口稍多きこと事實なりしとせんか、其原因の一は彼には黑死病及三十年役の如き著しく人口を減少せしめたる事件あり、然るに我邦には戰亂は少からざりしも、皆國內戰にして三十年役と比す可きものなく、又元より黑死病のなかりしことに存せざるか。姑く記して識者の精考を待つ。

*　*　*　*　*

本庄榮治郎博士は、本年（大正十三年）二月發行の其著『德川幕府の米價調節』に、英文を以て草したる『德川時代に於ける日本の人口』なる有益の研究を附載し、其中に、小宮山（近代の人口）、勝（吹塵錄）西山（官中秘策）諸氏の考證に基き、江戸時代の人口數を集計して一表を掲げたり。本文橫山井上兩氏の作表と參考するに甚だ有益なり。其大要を摘錄すれば左の如し。

年代	西暦	人口總數	指數
享保十年	1721	26,065,425	89.07
享保十一年	1726	26,548,998	100.00
享保十七年	1732	26,921,816	101.02
延享元年	1744	26,153,450	98.51
寬延三年	1750	25,917,830	97.24
寶暦六年	1756	26,061,830	98.16
寶暦十二年	1762	25,921,458	97.25
明和五年	1768	26,252,057	98.88
安永三年	1774	25,990,451	97.51
安永九年	1780	26,010,600	97.57
天明六年	1786	25,086,466	94.49
寬政四年	1792	24,891,441	93.71
寬政十年	1798	25,471,033	95.93
文化元年	1804	25,517,729	96.11
文化十三年	1816	25,621,957	96.50
文政十一年	1828	27,201,400	102.45
天保五年	1834	27,063,907	101.93
弘化三年	1846	26,907,625	101.35

第六章　資本の增殖

通說に於て生産の三要素と云へば、土地、勞働、資本を指すものなり。生産論に於ては、主として此等三要素の供給增加を考究す。マーシアルは此意味に於て生産論を以て『供給論』と爲す可しと考ふ。此見解は甚だ狹隘に失す、經濟學の供給論は生産物の供給、卽ち財の供給を論ず可きものにして、生産要素の供給は其手段たる可きのみ。然るに通說及び之を襲踏するマ氏は、要素の供給は、畢竟財の供給と同一事なりとするもの、如し、是れ謬なり。要素の供給增加は多くの場合に於て、財の供給增加を惹起す可しと雖も、此に依て直ちに兩者を同一物視するは、原因を以て結果と爲す、速斷に陷れるものなり。要素の供給增加は決して直ちに之と同一比例に於て、財の供給增加を齎らすものにあらず。時としては、要素の供給增加するも、財の供給增加せざることあり、縱令增加しても其比例に應ぜざることあり。蓋し財の供給は間接には要素の供給增加の作用を受く可しと雖も、直接には企業の力のみ之を支配するものなり。卽ち要素を配合按排して之を生産の用に充當する者ありて、茲に始めて生産は起るなり。要素の供給如何に增加すとも、其は直下に生産の增加を意味せず、否生産の起ることすらも意味せざるなり。要素を配合按排して生産を起すものは企業なり。されば直接には供給の增減を掌るものは企業あるのみ。供給論は企業に於て始めて其完結を見る可きものなり。然るに通說に於ては此點を論ぜず、或は論ずるも趣旨貫徹せず、企業を以て第四の生産要素なりとして、土地、勞働、資本と同一の作用を認むるのみ。其理由は前章既に一言したる處の如しと雖も、特に斯くの如き謬說を生ずるに就ては、資本の增殖の問題最も關係あり。否從來の經濟學に於ける資本論は、根本に於ける此誤謬の爲めに甚だ累を被れり。『商品に對する需要は勞働に對する需要に非ず』と云へるは、此意に解するときは一面の眞理を傳ふるものなり。（ジョン・スチュアート・ミルが）

供給の本質に就て斯く誤れる見解の行はるゝは、生産要素論成立當時の英國の國情甚だ密接の關係あり。當時の英國は國運勃興の時代に在りて、經濟上に於ては、人口は增殖

し、食料の供給に困難を感じ、如何にして其調和を保ち、如何にして國富を增加す可きやの問題最も切實なりし時なり。故に學者は只管供給增加論に重きを置き、生産要素を論じては、一意に要素增減（殊に增加）の問題に潛心したり。而して供給增加と云ふも、土地は其不變條件たる面積に就ては、增加と云ふこと問題とならず、其增し得るものは可變條件たる豐度あるのみ。人口の增殖は其傾向に於ては無限なり。此の人口を養ふ可く豐度を增進し、收穫遞減の法則の働き來るを免るゝの道は土地の改良農業技術の進歩に依るの外なし。然るに土地を改良し農業の進歩を圖らんとするには、主として資本の力を藉らざる可からず（勞働効程增進の問題は未だ重きを置かれざりき）。卽ち有限を以て無限に調和せしむる第三の要素たる資本の增減は、躰て供給の增減を支配する最大働因と看做さるゝに至りしは、思想の推移として誠に當然に屬せり。斯くて資本は、土地と人口との二要素が生産要素となり、經濟上の進歩の働因として活動するに缺く可からざる結合者にして、其增殖の問題は生産論の骨子たり、供給增加論の眞髓と認めらるゝに至れり。之に加ふるに實際上看過す可からざる一事情あり。急激の勢を以て農業國より工業國へ驀進しつゝありたる當時の英國に於ては、不動産に對する動産の重要大に加り、所謂 landed interest に對して monied interest の勢力著しく上進するを免れず、從て土地は收穫遞減の法則の爲に生産働因として、文明の進歩と共に其重要を減じ行くに、此傾向の作用を蒙ることなしと推定せられたる資本は、生産働因として、學者をして多大の希望を之に繫がしむるに至れり。されば、生産論を以て增殖論と爲すの傾向は、また資本論に於て最も著しく顯はれたるは偶然にあらず。從來の經濟學の資本論は、此眼孔より觀察して、始めて正しく諒解せらる可きものなり。然るに經濟學の進歩に伴ひ、資本を觀察するに、單に斯く狹き見地よりし、增加の動態にのみ就て研究するは不可にして、更に汎く資本全體に就て研究し、其靜態をも十分に考察するを要すること、學者の注意する所となり、マルクスよりボエム・バヴエルクを經て近時クラーク以下諸學者の資本學說を生じ、現在の經濟學に於て議論の紛糾せること資本論の如く甚しきはなき有樣にまで變化し來れり。遮莫、生産の働因としての資本、供給の要件としての資本に就ては、舊來の通說の方、少くとも理路の一貫せる點に於て、最新の資本學說に勝れり。今の混沌たる資本論は、一方に於て舊

時の結構を打破したれども他方には、未だ之に代はる可き適當なる地位を資本に與へず。故に予は以下マ氏を紹介するに舊來の通說の根柢の上に立ち其當然歸着す可き地位を示すを主とす可し。故に此章題して單に『資本』と云はず、『資本の增殖』と云ふ。蓋し資本の本質論は之を措き專ら動態に就て觀察するの意を明かにせんとするが爲なり。

生産動因としての資本は、一方に富と關連し他方に貨幣と相接す。換言すれば有限の土地の生ずる所を以て、無限に增殖する傾向ある人口を養はんとする人間の努力は、先づ資本なる態に於て發動するものなり。既に前章示せる如く、今日現在の立場に於て、予は貨幣こそ此作用を爲すものと信ずるなり。而も單に貨幣と云ふときは、具象的なる貨幣素材の爲めに局限せられて、吾人の觀察を妨ぐるもの少からず。正統派の學者必ずしも此理に想到せざりしにはあらず。否凡ての正統派の起る遠き以前、アダム・スミスに先つ約百年の前に於て、英國の哲學者ジョン・ロックは明かに此理を道破せり。曰く、

This is certain, that in the beginning, before the desire of having more than men needed had altered the intrinsic value of things, which depends only on their usefulness to the life of man, or had agreed that a little piece of yellow metal, which would keep without wasting or decay, should be worth a great piece of flesh or a whole heap of corn, though men had a right to appropriate by their labour, each one to himself, as much of the things of Nature as he could use, yet this could not be much, nor to the prejudice of others, where the same plenty was still left, to those who would use the same industry. John Locke, Two treatises on Civil Government. Bk. II ch. V. Of Property. § 37. Works. Vol V. 1823. p. 359. Routledge Edition. p. 209.

人が其要する所より以上のものを有せんとする念の爲めに、人世に向つての有用性に基く物の固有價値變更せられ、又は消費若くは消滅せらるゝことなき金の一片が多くの肉片又は穀物の大量と同一價値を有す可しと協定するに至れる以前の時代に於ては、人は自ら用ひ得る限りの天然物を其勞働によりて占有し得たりとも、其高は多からず、而して、同一の勞を厭はざるものに對しては、同樣に充實せる物が殘されあるにより、其は他人を害することなかりしは確なり。

ロックは予が主張する所の理を反對の方面に於て道破したるものなり。即ち貨幣なる手段起りたる爲め、人は其直接欲望充足の用に供す可きより以上のものを私有するに

至れりと說く。此理を反對の側より見れば貨幣あるによりて、人は時を隔て、所を異にする生産の結果たるものを、自己の好む所と時とに於て、欲望充足の用に供するを得るものにして、從て現在現所に於て與へられたる有限の生産物のみに局限せらるゝことを免かれ、其無限の欲望を克く調理し行き得るものなりと云ふを得可し。卽ち貨幣とは、人が有限のものを以て無限の欲望を充たさんとする必要に促されて發明したる一手段たりとも云ひ得るなり。此意に於て予は貨幣は有限性の代表なりと云へり。此事は猶別に詳論するに讓りて、今正統派の資本の概念は、卽ち此有限無限調和の手段たる貨幣の意を寓するものにして、具象的なる貨幣素材の爲に限局せられざらん爲め、貨幣價値のembodiment(體現)として資本を論じたるなり。故に此の意を推して、資本とは凡て『貨幣價値を有するもの』の謂なりと云ふものあり、蓋し其意を得たるものと云ふ可し（資本の定義としては、其不當なることは前既に論じ置きたり）。或は又富なる語をも此意に用ゆるものあり。アダム・スミスのStock佛國學者のvaleurs accumulés亦此意を寓す。ジェヴオンスは能く此種學者の眞意を洞察したり。(Principles of Economics. London 1905 p. 16. J. S. Mill on the definition of wealth). を見よ。卽ち

ミルが富の定義としてSusceptibility of accumulation(蓄積可能性)なるものを擧げたるは、ロックが貨幣に就て云へる所と根本の思想を同ふするものなり。『蓄積せられたる有限』は、幾多の時所、人、使用の間に配合按排せられて、克く無限の用に應ずるを得、富の存在は卽ち此必要に應ずるにありと爲すものなり。然れどもジェヴオンスが指摘する如く、『蓄積』を富に繫くるときは、論理上幾多の困難を生ず。茲に於て後の學者は、（否ミル自らさへ他の場所に於ては）富に就て『蓄積』を云々することを已め、之に代ふるに資本を以てし、資本とは『蓄積せられたる富』若くは『過去勞働の蓄積』を云ふと定むるに至れり。此は資本の定義としては、甚だ謬れること予既に之を論ぜり。されど從來此種定義の汎く行はれたるは、其が資本の本質に就て、又た實際經濟生活に於ける資本の作用に就て、觀察したる結果にあらず、生産要素として、土地と人口との結合要件たる概念を論理上定むる必要あり、此必要に應ぜん爲め、偶々『資本』なる語を捻出し來りて之に充當したるものなり。此點より見て、始めて從來の資本論が主として蓄積論たるに止りし眞因を窺ふを得。『蓄積』とは過去を現在の用に供する事なり。有限を無限に配合按排する事なり。

此ありて始めて有限無限の調和行はれ、此れありて始めて土地と人口とが特に『經濟的』に結合せられて、生産要素（若くは近時の學說の國民經濟の要素）となるを得るなり。資本は唯手段なり。而も此手段の增殖こそ此の經濟的調和を愈々十分ならしめ、依て以て人の欲望充足をより十分ならしめ、供給の增加を以て需要の增加に應ぜしむるを得るなれ。此れを國富增進の唯一法とすると、是れ通說の資本增殖論の骨子なり。『蓄積增殖』是に於て人間經濟活動の眼目となる。

今マ氏が本章に於て論ずる所は、此立場より考察するときは、十分に其意を諒し得可し。氏は先づ第一節より第六節に至る間に於て、『蓄積』（氏はミルの擬に倣ひ之を富と名け、富と資本との區別は此點に於て之を施すを要せずと主張す）の成立を稍々歷史的に叙述し（但し其叙述は甚だ不十分なり）、次に貨幣經濟の發生に論及し、終に蓄積の動機を說て自己の爲にするよりも家庭的愛情の爲めにする場合多きを指摘す。而して第七節に至りて蓄積の淵源を論じ、續て需要論の所說に關連して物の異れる使用の選擇は、卽ち蓄積に導くの理を說き、終りに蓄積增進の割合を考究す。此結構は卽ち予が上段論ずる所を明かに立證するものにあらずや。第一乃至六節は議論の要旨に左したる關係なく、其說く所極めて皮相的なるを以て之を省き、第七節以下の大要を左に紹介して、更らに其然る所以を明ならしめん。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

蓄積の淵源。貯蓄の力は必要なる支出以上に剩る所得の高によりて定めらる。されば富者こそ貯蓄の力を多く有するものなれ。英國に於ては資本は主として大所得より生ずるものにして、小所得より生ずるものは少し。而して十九世紀の初（卽ち生産要素論成立の當時）の英國に於ては、貯蓄の習慣の最も普及せるは、商業階級にして、地主及勞働階級は遙かに劣れり。此等は從來の英國經濟學者をして、貯蓄と云ふときは直ちに資本の利潤を思はしめ、其他を顧みるを忘れしめたる原因なり。

然れども、近代の英國に於てすらも、自由職業の所得、勞働者の賃銀は、蓄積の淵源として重要のものに屬す。文明の程度低き時に於ては此等は最も重なる淵源なりき。殊に考ふ可きは、中等階級就中自由職業者は、貨財に於て蓄積を爲さずとも、子の教育に多大の資

を投じ、此態に於て大なる蓄積を爲す爲め、自らを制すること甚大なるを常とせり。勞働者も自ら其得る所の賃銀の大部分を割きて、其子の健康體力に投資するものなり。從來の經濟學者は、人間の才能が生産の手段として、他の種類の資本に其の重要劣ることなき肝要のものなる所以を度外に措けり。予は之に反して主張す、富の分配に變動起りて、勞働者により、多くを與へ、資本主により、少くを與ふるときは、他の事情均しき限り、有形生産の增加を促進す可き傾向を有するものにして、而も有形の富の蓄積は之が爲めに敢て碍げらるゝことなきものなりと（此點予は確信を以てマ氏に贊同す、近來ピグーは此理を其の『厚生經濟學』に於て詳かに考究したり。猶拙著『社會政策と階級鬪爭』第一六九頁以下を見よ）。固より其變化餘りに急激にして、公けの安全に打擊を與ふるが如き場合には、他の事情同じきを得ざる可し。然れども有形の富の蓄積は爲めに一時的に聊か停止せらるゝことありとも、純然たる經濟上の立場よりのみするも、其は必ずしも損失を以て目す可からず。靜かに又妨害を喚起すことなく行はれ、而して其結果人民の大多數により、良き機會を與へ、其生産力を增進し、又た子の時代に至りて遙かに生産力に富める勞働者を起す可き作用を有する善良なる習慣を涵養するを得るときは、利は損を償ふて優に餘あり。何となれば之によりて全體に於ては却て有形の富の增殖をも促進す可ければなり。

物の現在の使用と將來の使用との選擇と蓄積との關係。需要論の條下に、物は其幾多の異れる使用を按排配合するにより、より多くの限界利用を生ず可く、而して限界利用均等の法則の實現は之によりて確めらるゝものなるを說けり。物の現在の使用と將來の使用との選擇も此理に從ふこと亦既に云へり。唯此場合には一將來の使用は現在の使用に比して不確なること二人間普通の情として、大抵は同一の享樂を與ふるものに就ては、將來の使用よりも、現在の使用を欲するものなることの二の事情を併せ考へざる可からざること讀者の記憶する所ならん。此點蓄積の多少と密接の關係あり。

思慮深き人は、同一の資料が生涯の何れの時代に於ても同一の快樂を與ふ可しと信ずる時は、其有するものを全生涯を通じて均一に配分す可し。而して將來に於て（老年に至り）彼が所得を得るの力減少す可きを知る時は、彼は必ず此將來に對して其幾分を貯

蓄するなる可し。彼の貯蓄を爲すは、之によりて增殖を得る（利子附加するにより）場合のみに限るものに非ず、現在よりも其高却て減少するに相違なきを知るときと雖も、猶之を爲す可し。果實若くは鷄卵を冬季の用の爲めに蓄積するときは、其味は現在直ちに食するよりも必ず劣る可しと雖も、冬季には之を得ると難きを知るが故に蓄へ置くが如き是れなり。銀行に貯蓄金を預けて利殖するの道存せざるときは、之を自ら保藏する煩と勞をも辭せざるものある可し。されば預金に對し多少の手數料を徵するも喜んで其貯蓄を託す可し。卽ち利率は消極的なる場合必ずあり得るなり。されど今日普通の場合は、貯蓄は現在を將來の爲めに犧牲とする謂にして、斯く將來まで待つてふ犧牲に對しては、消極的に利子を生ずるを常例とす。此の『待つこと』を經濟學に於て從來多くabstinence（節制）と名けたれども、是は誤解を惹起し易し。節制と云ふは、其貯蓄せらるゝものに就てのみ云ふものにして、貯蓄する人に就て言ふにあらず。最も多くの蓄積を爲すものは、富者なり、然れども富者は一般に節制を守るものと云ふ可からず、極めて華美なる生活を爲しつゝ猶貯蓄するなり。マルクス故に此の意に於ける節制を朝つて、豪奢なる生活を營むロスチアイルドは節制を守るものにして、貯蓄の餘裕なきは勿論其日の生活にも窮するものは節制を守らざる者なるかと皮肉の言を發したるは、此誤解に基くものなり。富者が其所得の全部を費消し盡さずして、幾分を貯蓄するは、卽ち其部分に就ては節制を守る者なり。貧者に就ては節制と云ふとは始めより問題とならざるなり。遮莫、斯く誤解せられ易き節制なる語は勉めて之を避くるを要す、予は之に代へて單に『待つ』Waiting と云はんと欲す（マ氏はボエム・バヴエルクがマ氏を以て『節制學說』Abstinenz-theorie を執るものとするは曲解なりとて他の所に於て辯解の辭を費したり）。

利率と貯蓄との關係。一般に云へば、利率高き程貯蓄多き理なり。其反對に、利率低きとき、貯蓄心亦少し。然れども此原則には例外あり。第一はサー・ジョサイア・チアイルドの云へる如く、利率高き國に於ては、富を貯蓄するものは早く其業を已め、既に貯蓄したる富を貸付けて、其利子に衣食せんとする傾向あり、之に反し、利率低き國にては商人は永く商人として其業を繼續し利息生活に隱退せざる爲め、國全體としては、利率高き國よりも、より多くの富の蓄積を見る場合是れなり。其二は、一定の所得を生ず可き金額を貯蓄し

て老後若くは家族の爲めに計を爲さんとする場合の如き是れなり。卽ち一ケ年四百磅の所得を生ず可き丈けの貯蓄を爲さんとする者ありとせよ、利率一ケ年五分なるときは八千磅を貯蓄すれば足れり。然るに利率四分なるときは一萬磅を貯蓄するを要す。卽ち利率低きときは多く貯蓄し、高きときは少く貯蓄するに止まる可し。

かく例外の場合ありと雖も、大體の原則としては、利率高きときは貯蓄を促進すること多く、低きときは少きは明なり。而して高き利率は獨り貯蓄心を高むるのみならず、貯蓄力を高むるものにして、利率高きは生産力の增進を表はすものと云ひて差支へなきこと多し。然れども從來の學者が專ら重きを利率の高低に置き、勞働者の所得を減殺するを顧慮せざりしは誤なり。有形物の蓄積獨り尙ぶ可きにあらず、勞働者が子の敎育體力に投ずる蓄積の力の大なること決して忘る可からず。而して又年々の資本の增殖は、既に存在する資本全額より見れば、寧ろ一小部分にして、縱令利率高まりて爲に資本の蓄積增進すとも、資本全額は、未だ著しき增加を見るものと速斷す可からざるなり。

* * * * * * * *

以上マ氏の說く所平々淡々何等の奇なしと雖も、單に供給增加の點より見たる從來の資本論の要旨は此に盡きたり。

第六章　補　論

資本に關する著書甚だ多し。其一二は前編既に揭げたり。就て看よ。猶近來資本の本質及び其增殖に關して最も精細の研究を爲すものは米國の學者アーヴヰング・フヰッシアーなり。其著

Irving Fisher, The nature of capital and income. 1906. ——The rate of interest. 1908.

の二書の所論は、更らに他の所に於て論究す可し。

此章の根本思想はアダム・スミス既に之を定めたり。國富論第二篇『資本の性質蓄積及使用』（キアナン版二百五十八頁乃至三百五十四頁）の中、特に第三章は必ず讀まざる可

からず。有名なる『資本は節儉によりて增加す、生産によりて增加せず』Parsimony and not industry, is the immediate cause of the in crease of capital. (三百一十頁) てふ奇言は此章の要旨を道へるものなり。

第七章　勞働効程の增進と分業

蓄積せられたる富は資本てふ生産要素として、過去を現在に、現在を將來に、按排配合する手段となり、茲に有限の土地が無限の人口を養ふ調和の道與へらる。然れば生産要素論は此を以て盡きたるか。夫れ然り豈夫れ然らんや。資本の增殖は生産增進供給增加の物的方面を代表するのみ。十八世紀の末葉より十九世紀の初に渉り、富の增殖に於る物的手段として資本の重要甚だ大にして、學者必ず先づ此に着目せざる能はざりしことは既に說く所の如しと雖も、而も之と同時に富の增殖に於ける、生産の促進に於ける、人的方面の急激著明なる變化亦識者の注意を逸する能はず。過去勞働の蓄積愈々多くして、現在の勞働の及ばざる所を補ふ力の大なるを見ると共に、現に生産の用に供せられつゝある勞働の力の增進亦大なる、之れを看過する能はず。勞働供給の增加は、先づ數量の上に於る增加に就て人の注意を引けり。マルサスの人口の法則は、卽ち此理を說きて、勞働の數量上の增加は無限なる供給を現す可き傾向を有し、之に對する需要（生産上の業務の上に顯はれ、又た食料の供給の態に於て顯はるゝ）よりも、遙かに速かに增進するものなるを示せり。されば勞働の數量的增加は、生産供給の働因としてよりも、寧ろ生産需要の働因として觀察せられざる可からず（人は生産の目的にして、手段に非ずとの淺薄なる議論は姑く措きても）。故に國富增進の立場より見ては、勞働の數量的增加は unmixed good『無雜なる善事』と看做すを得ず。茲に於て人口の增殖は却て之を喜ばざるの傾向生じ、只管に富の蓄積たる資本の增殖に於て、此難關を透過せんことを求むるに至れり。而も資本の增殖如何に著大なるも未だ之れのみを以て、此難關を解決し得ることを能はず、學者は更らに眼を他の方面に轉じ、資本の增殖と相提携して、有限無限調和の手段たり、國

富增進の働因たる可きものゝ研究に志ざすに至れるは、決して偶然の出來事と云ふ可からず。他の方面とは、卽ち生産力增進の人的方面を云ふ。換言すれば、生産要素としての勞働の數量の增進ならずして、品質上の增進是なり。予は之を名けて勞働効程（能率）增進の問題と云はんとす。均しく勞働の力の增加なり、而も數量の增加と品質（生産能率・効程）の增進とは、經濟學に於て、甚だ趣を異にせる取扱を受く。其理由は疑もなく前者は經濟學者によりて多く悲觀せられ、後者は樂觀せらるゝによるものなること論なしと雖も、而も兩者の根本的性質に於て又理由の存するを見出さゞるを得ず。蓋し勞働の數量的增加は、元來其自らの問題に非ず。嚴密に云ふときは、生産の働因としての人口の數量增加なるものなし。人口は生産の働因たるが故に增し或は減ずるものにあらず。勞働者の數は必ずしも一國人口の多少と比例するものと云ふ可からず。人口增加するも勞働の供給必ず增す可しと云ひ難し。卽ちマルサスの人口の法則は、單に生産要素たる勞働に就て立論したるものにあらず。然るに勞働効程の增進は、斯くの如き廣汎なる一般的問題にあらず、生産增加に特殊なる問題なり。否生産要素の一としての勞働者は、マルサスの人口の法則と直接に關連するものにあらず。然るにマルサスの人口論の書く行はれ、斯學の公認せる學理と成るや、經濟學は恰も機械的細分法の支配の下に立ち、アダム・スミスの創めたる哲學的の廣き論述法の漸次閑却せられんとする時にありて、人口論は其適當の位置を斯學の中に與へられず、單に生産要素論の一隅に限局せられ、生産要素としての勞働の研究は、人口論の爲めに、殆んど全く其地位を奪ひ去らるゝに至りぬ。此が爲めに累を受くるものは人口論のみならず、勞働論も亦這の巨人の跋扈に制せられて、身所を仲す餘地なく、極めて不具なる發達を遂ぐるに至れり。近來に至り、學者或は茲に想到するものあり。キアナンの如きは、人口論を勞働論より分離し、却て之を生産要素論中土地の條下に移せり。予は氏の果斷を喜ぶ。氏の用意は堅固なる論據を有す。而も予は之を以て聊か極端に馳せたるものならざるかを疑ふものなり。近來獨逸の學者は、人口論を全然生産要素論の範圍外に置く者あり。（前段を看よ。）セリグマンは經濟生活の基礎としては、自然包圍と人口とのみを論じ、後段に至りて別に生産論を設け、勞働（人口論を離れたる）、土地資本企業の四要素を說けり。我邦にても最新經濟書たる津村秀松氏の國

民經濟學原論は之と類似の編次を立てたり。是れ慥かに一見識たるを失はず。而も予は此說に服從す可き所以を見ざるものなり。故他なし、人口論は生産論を離れては、殆んど存在の理由を失ふ、土地が有限を代表し、人口が無限を代表して相對立し、此兩者を調和するの必要ありて茲に始めて經濟行爲起り、茲に始めて生産論成る。生産の働因として人口の問題必ず說かざる可からざるなり。之を離れたる人口論は、人口統計學の人口論と何の撰ぶ所かある。經濟學が『ポリヒストリー』を以て自ら甘んず可きものならば已む、然らざる限り人口論は其出生の地を離れて空虛の天に繫がる可きものにあらず。

今日の大多數の學者は此點に於て極めて漠然たる立場に立ち、勞働論を分て、數量論品質論の二と爲し、人口論を以て前者に充て、後者に就ては漫然たる常識談を羅列して空白を埋む。予の服し能はざる所なり。

マーシアルの結構亦此嫌あるを免れず。氏は、第四章に『人口の增殖』と題して數量論としての人口論を說き、第五章は『人口の健康及力』第六章は『産業上の習練』と題し勞働品質論を爲す、而も其所論は到底常識談の水平以上に昇らず。故に予は第五第六の兩章は全然之を捨てゝ顧みず。別に『資本增殖』の後に此第七章を創置するを勝れりと信ぜり。蓋し學說發展の順序此くの如くなりしが故なり。マルサスの人口論に續て學者の最も心を傾けしは資本增殖論なりき。而も資本の力のみにては國富增殖働因の論究盡さゞるものあるを知るに及び、轉じて勞働効程增進の問題の研究勃然として起れり。而して企業論の發生直ちに之れと關連す。斯く觀察してこそ學理發展の有機的體系明瞭なるを得可けれ。漫に私意を挾みて剪裁加除したるものは、此の發展の行程を無視するものにして、一家の私論としても、猶ほ不十分なるを免れず。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

勞働効程增進の問題は幾多の事情を包む。マ氏の論じたる、體力健康智力の增進、産業上の習練の增加の如き、近來の學者の皆說く所なり。ブ師は之を大別して、一勞働力の增減と二勞働心の增減の二と爲し、一に就ては專ら人口統計論を試み、人口の年齡體性健康職業熟練等を論じ、二に就ては心理論を爲し、社會法律制度等の作用より、勞働條件の良否殊に賃銀と勞働時間との關係、終に賃銀制度の適否を考ふ（賃銀制度論を此處に入る

ると、予は其可なる所以を悟る能はず。プ師議論の梗概は津村氏の新著之を傳へて要を得たり、就て看る可し　學者各信ずる所あり。其論ずる所の千差萬別なる固より其所なり。

然り然りと雖も、此等總ての問題は皆後世に至り、學者其好む所に從ひ、隨所に加減配分したるものにして、抑も經濟學に於て、資本增殖の問題と關連し供給增加の最大働因として考究せられたるものは此等にあらず、別に一大問題あり。何ぞや、曰く、分業卽ち是れなり。他の問題を否定するにあらず、唯だ分業の問題の甚だ重大なるが爲め、掩はれて顯はれざりしのみ。而して其責任は亦た分業論を唱出したるアダム・スミスに在り。

アダム・スミスは、其書の卷頭に明言すらく。

According, therefore, as this produce, or what is purchased with it, bears a greater or smaller proportion to the number of those who are to consume it, the nation will be better or worse supplied with all the necessaries and conveniencies for which it has occasion.

But this proportion must in every nation be regulated by two different circumstances; first, by the skill, dexterity, and judgement with which its labour is generally applied; and, secondly, by the proportion between the number of those who are employed in useful labour, and that of those who are not so employed.——Introduction and plan of the work. Cannan's Edition. p. 1.

此の生産物又は之を以て購はるゝものゝ量が之を消費する人口の數に對する比例多きか少きかにより、一國民は其れに對して機會を有する一切の必要物及有用物を以て十分に供給せらるゝや否や定めらるゝものなり。

乍去、此比例は各國に於て二個の異れる事情によりて支配せらるゝものなり。第一は勞働を充用する熟練・習練及判斷にして、第二は有用なる勞働に從事する者と然らざるものとの數の割合是れなり

と。然るにアダム・スミスは、斯く自己の結構を豫言し置きつゝ、實際に於ては其第一に就ては別に細論を爲さず、第一編第一卷の初に於て左の如く概言するに止る。

The greatest improvement in the productive powers of labour, and the greater part of the skill, dexterity and judgement with which it is anywhere directed, or applied, seem to have been the effects of the division of labour. p. 5.

勞働の生産力に於ける最大の進歩及何れの處に於ても勞働を向け若くは應用する熟練・習練・判斷の大部分は、分業の結果たりしものゝ如し

而して其第二に就ては、マルサス出づるまで何等の定論なかりしことは前既に說けり。斯くてアダム・スミスは『勞働の生産力增進の原因』と題する其第一編に於ては、分業論を以て終始するのみにて、他の原因に論及せず。而して十九世紀前半の經濟學者皆アダム・スミスの跡を追ふのみ。是れ彼等が一樣に『勞働効程增進論』を以て直ちに分業論と同一物なりと看做すに至れる所以なり。

經濟學の定論たる分業論は、斯くして發生し、斯くして普及せるなり。此事情を度外視して、アダム・スミスを論評し幷に後の分業論に加除を試むるものは、皆中らず。

アダム・スミスは分業論を爲すに、單に勞働行程の分割と云ふが如き狹き範圍に限りたるものにあらず、偶々止針の例が有名となりし爲め、後人は此點を以てスミス議論の要點と思惟するに至れりと雖も、スミスにありては、此は其眞意にあらず、社會の全般に涉る職分の分掌による一國生産力の增進を主眼としたるものなり。此點に於て近來ブュヒアーが、アダム・スミスの所謂分業は『勞働の分割』Arbeitszerlegung の現象に過ぎずと爲し、別に廣義の分業を論ぜざる可からずと主張するは、自說を唱ふるに急にして他の功業を沒するの嫌なきにあらず。之れに反し、アダム・スミスの分業論は廣義に解す可きものなりとするキアナンの論極めて公平なり。曰く、

By the division of labour he did not, of course, understand merely the division of labour which takes place within the walls of a single factory, or within the limits of a single business. The celebrated example of the pin factory, with which he begins his exposition of the subject, was only an endeavour to make "the effects of the division of labour in the general business of society" "more easily understood by considering in what manner it operates in some particular manufactures." He includes in the division of labour all that is sometimes called the separation of employments; it is not over the manufacture of pins, heads that he waxes eloquent, but [in the paragraph at the end of chapter I, where he shows how each article of "the accomodation of the most common artificer or day labourer in a civilised and thriving country" "is the produce of the joint labour of a great multitude of workmen." op. cit. p.44

彼は分業の名の下に單に一工場內又は一營業に於て行はるゝ分業のみを意味したるものにあらず。彼が分業論の勞頭に擧げたる止針工場の有名なる引例は、社會に於ける一

般の業務に於ける分業の作用を特殊の工業に於ける作用を示すにより寧ろ容易く諒解せしめんがために選みたるものに過ぎず。彼の分業と云ふものには所謂職業の分立も含む。彼が最も意を用ゐたる所は針の製造其事にあらず第一章の終に於て文明繁華の國に於ては最も平凡なる工人日雇稼の生存必要品と雖も數多き勞働者の協働の産物なるの理を説明したる所是れなり

ニ。是れアユアーが彼の意味に於ける分業として論ずる所に何の異る所かある。予は必ずしもア氏を以て不誠実の論を成せりとするものにあらずと雖も近來ア氏を祖述するもの、多くが抑もアダム・スミスの分業論の大要をだも窺はず唯だ追從を事として殆に彼を非難するが如くなるを嘉する能はざるものなり。

アダム・スミスが分業に三大利益ありと說けるは人の普く知る所なり。三大利益とは今彼自らの言を以て示せば左の如し

This great increase of the quantity of work, which, in consequence of the division of labour, the same number of people are capable of performing, is owing to three different circumstances; first, to the increase of dexterity in every particular workman; secondly, to the saving of the time which is commonly lost in passing from one species of work to another; and lastly, to the invention of a great number of machines which facilitate and abridge labour, and enable one man to do the work of many. op. cit. p. 9.

分業の結果として同數の人が爲し得る仕事の分量の大に增加するは三の異れる事情より起るものなり。第一は各勞働者の熟練の增進第二は一業より他業に轉ずるに力り徒費する時間の節約第三は勞働を便にし省略し依て以て一人をして數人の仕事を爲すを得せしむる多數の機械の發明是なり

ウエーキフヰールドは國富論の註に分業は Co-operation 協業の一部と認む可きものなりと主張して以來後の學者皆之を祖述し殊にジョン・スチユアート・ミルは Co-operation, the combination of labour なる一章を其原論中に置けり。マカロックは勞働生産力增加に先づ最も缺く可からざるは Security of property『所有の安固』なりとせり。ミルは更らに附加するに

1. Greater energy of labour
2. Superior skill and knowledge

3. Superiority of intelligence and trustworthiness in the community generally.

一、勞働のより大なる力

二、優れたる熟練及知識

三、社會一般に智慧及信用の優れること

の三を以てせり。斯くして今日現在の勞働効程增進論の基礎は置かれたるなり。

マーシアルは其第九章に於て産業組織論の一部として、分業と機械の影響とを論ず。曰く、千篇一律常に同一事を繰返へす工業的行程は、晩かれ早かれ必ず機械によりて擔任せらるゝに至る可し。但し其間遷延あり、困難あるは勿論なり。然れども仕事の規模相應なるときは、資力と發明力とにより必ず此の移轉行はる可し。かくて機械の進歩改良と、分業の發達とは或程度迄相關連するものなり。然れども此關係は普通人の思ふ如く密接なるものにあらず。分業の發達を促がす重要の原因は、市場の大なること、同一種類の貨物に對し大量の需要起ること是れなり。而して機械改良の重なる作用は、既に分業せられたる仕事をより廉價により精密ならしむるに在り。

機械が精密なる仕事を爲すにより新たに起れる現象は、所謂 System of interchangeable parts『代替部分式』なるもの、愈々普及すること是なり。代替部分とは、機械の何れの部分も容易に修繕の爲め、代替するを得、又一の機械の部分を他の機械の部分として充用するを得ることを云ふ。是れ最も精確に同一物を全く同一型に於て製作する機械なくしては望む可からざる所なりと。斯くしてマーシアルは其新案に係る external economies『外部の經濟』と internal economies『內部の經濟』との說を述ぶ。曰く、

Those dependent on the general development of the industry——external economies.

Those dependent on the resources of the individual houses of business engaged in it, on their organization and the efficiency of their management——internal economies.

産業の一般的發達に原因するもの——外部の經濟

個々の企業者の資源並に其組織及經營の能率に原因するもの——內部の經濟

是れによりて見る、マーシアルは勞働効程の增進を單に分業と勞働者の體力、健康、産業上の習練との上のみに止めず、更らに進んで汎く外部の周圍事情の內に求め、亦た企業組織

の體系と其活動との内に求めんとするものなり。是れ軈て今日最も進歩せる學者の立つ所の立場にして、而して企業論の研究の勃興し來れる所以實に茲に胚胎するなり。之を資本の增殖に尋ねて滿足する能はず、進んで勞働の生産能率、殊に分業の發達に求めて亦た十分とせず、勞働者の體力智力、健康熟練に歸して足らず、茲に經濟學は十九世紀の末葉に至り、供給の眞の淵源、國富增進の最大働因を究めて之を企業の組織に得たり。而して實際經濟界に於ける企業振興の時代亦之れと時を同ふす、學說の發展地を離れて天空に翱翔するものにあらざることを悟る可きなり。

第七章　補　論

本章參考書として予は先づ舊譯勞働經濟論を擧げんとす。彼書に論じたる處本章全く省略に附したればなり。（拙著『國民經濟講話』第五編『勞働經濟講話』を見よ。）其他は一般の勞働論及分業論を原論の書に就て看る可し。其重なるものはセリグマン原論第百二十三節（第三版二百八十五頁）に掲げたり、參考せよ。

恩師ブュヒアーの分業論は近時學者中出頭の作、普く祖述せらるゝ所なり。其論載せて師の

Entstehung der Volkswirtschaft. 12. u. 13. Aufl. 1919.

英譯

Industrial Evolution.

の七、八、九の三篇にあり。必ず參考す可し。

第八章　マーシアルの企業論

勞働効程（能率）增進の原因の研究は先づ分業論を喚起したり。然るに分業の現象

は深く根柢を社會組織の中核に有す。分業は協業の一種なりとの發見は、更らに此兩者の淵源に溯るの必要を感ぜしめざる能はず。企業論茲に於てか起れり。マ氏は其産業組織論の劈頭に於て云ふ。

Writers on social science from the time of Platon downwards have delighted to dwell on the increased efficiency which labour derives from organization. But in this, as in other cases, Adam Smith gave a new and larger significance to an old doctrine by the philosophic thoroughness with which he illustrated it. After insisting on the advantages of the division of labour, and pointing out how they render it possible for increased numbers to live in comfort on a limited territory, he argued that the pressure of population on the means of subsistence tends to weed out those races who through want of organization or for any other cause are unable to turn to the best account the advantages of the place in which they live.

プラトーン以降社會科學の學者は、勞働が組織によりて其効程（能率）を增進するものなるを說くもの少からず。然れども他の點に於けると同じく此點に於ても、アダム・スミスは舊來の學說を說くに、哲學的深遠を以てし、之を例示するに實際上の知識を以てしたるが爲め、之れに新にしてより大なる意義を與へたり。彼は分業の利益を述べ、之れにより限ある領土の上に增殖する人口が不自由なく生活し得るものなるを示したる後、人口の食料に對する壓迫は、組織を欲くにより又は其他の原因により、其住む所の供する利益を十分に活用する能はざる民族を滅亡せしむる傾向あることを論ぜり

と。而してアダム・スミス以降學者は彌々土地と人口、有限と無限との調和の必要を見るや、資本の增殖、勞働効程（能率）增進の最高の問題として、否此等凡てを包含する生産の働因として企業組織の研究に心を潛むるに至り、終に企業を以て、土地、勞働、資本と相併立す可き一の生産要素なりと認むるに至れり。然れども企業を一生産要素とすることは種々の點に於て困難なる問題を伴ふを免れず。土地、勞働、資本は皆具象の有形物なり（資本と資本財との區別論は當時未だ起らず）。然るに企業は具象の有形體と云ふ能はず、企業の機關は多く有形體より成ると雖も、抑も生産に與て大なる力となるは、此等有形體にあらず（否此等有形體は其自らに於ては、企業の爲めに充用せられたる資本なり）、生産の働因となるものは、無形の組織人的結合關係なり。是を以て一方には企業の大なる力

は十分に認むるも、之を一生産要素とするを欲せざる學者あり、他方には無形の組織たる企業を以て生産要素と看做す以上は、國家文化の如き亦皆生産要素たらざる可からずと主張するものあり。今予を以て見るに、此等諸説皆淺薄皮相の見たるを免れず。抑も企業は組織たりと云ふ以上、之れを他の生産要素の班に伍し、同一對立の地位を占めしむるは甚だ中らず。有形無形の標準に拘泥して、生産要素とす可し、爲す可からずと論ずる亦た未だ企業の眞相を究めたるものにあらず。企業の本質は、凡ての所謂生産要素を手段として成るものにして、生産要素が生産要素たるは、企業の爲めに利用せらるゝや否やによりて始めて決定せらる可きものなり。されば企業こそ眞正純粹の意義に於ける生産の働因たるものにして、供給增減の因て出づる最先の淵源なり。一國の生産を興廢し之を增減する最高最終の決定者は獨り企業あるのみ。所謂生産要素なるものは皆其手段たり其要具たるのみ。然れば、手段の研究に始まりたる供給論生産論は、企業の研究に於て完結を得可きものなり。近來の組織論的立場に立つ學者は粗々此意を會し、企業を生産論の範圍外に置くこと、シュモラーの如きありと雖も、此は亦他の極端に馳せたるものにして、予は與する能はず。企業論なき生産論は首腦なき體軀のみ。蓋し企業の研究は經濟上に於ける組織の力の大なるを彌々認めしめ、轉て經濟行爲論の狹き局面より脱して、汎く組織を中心としたる新なる經濟學を建設せんとの希望を學者に抱かしむるに至れりと云ふも大過なかる可し。マーシアルの如く常に折衷的態度を執る學者が、其の生産要素論に於ては傳來の行爲本位の見解を取りつゝ、企業論に至り、俄かに態度を改めて、組織論的觀察を試むるもの、亦た以て此邊の消息を傳ふるものならずんばあらず。

マ氏は第五版の序文に云へり、

The Mecca of the economist lies in economic biology rather than in economic dynamics. But biological conceptions are more complex than those of dynamics; a volume on Foundations must therefore give a relatively large place to mechanical analogies; and frequent use is made of the torm "equilibrium", which suggests something of statical analogy. VIII.

經濟學者の最終の目的地は經濟動學（予が經濟行爲論と稱するもの）よりも寧ろ經濟生物學（經濟組織論・經濟生活本位論）に在り。然れ共生物學的概念は動學的概念よりも複雜なり。從て原論の書に於ては比較的多く力學的類似を擧ぐるは已むを得ざる所なり。

即ち此書に於ては、醇學的類似に近き意を寓せる『均衡』なる語を屢々用ゐたる所以なりと。氏の立場は克く此一言に顯はれたり。而して氏は此第四編に於て組織としての企業を論ずること甚詳細にして、全編十三章の内六章を之に費せり。即ち先づ第八章に於て『産業の組織』と題して、組織が生産力を増進するの理は古來より認められたる所なれども、アダム・スミスに至りて其理明確に闡明せられたりと云ふことに論を起し、續て生物界の原則は、亦た經濟界にも適用し得らる可きものにして、殊に生存競爭の理法は、生物の發展を支配する如く、經濟組織發展の根本原則たる所以を明にし、社會上に於ては、生存競爭の嚴格なる作用は世襲習慣によりて緩和せらるゝものなりと云ひて、古の『カースト』今日の社會階級に論及し、次に分業に基く社會産業の組織にも亦缺點あることを指摘し、アダム・スミスは克く之に注意を怠らざりしも、後世の祖述者は、分業の利益を掲ぐるに急にして、其弊害を殆んど度外に置きたる爲め、幾多の誤謬を生じたるを示し、就中器官は使用によりて發達すてふ生物學上の根本理を忘れたるは、甚だ不可なりと云ひ、終に結論を下して云ふ樣

It is needful then diligently to inquire whether the present industrial organization might not with advantage be so modified as to increase the opportunities which the lower grades of industry have for using their mental faculties, for deriving pleasure from their use, and for strengthening them by use; since the argument that if such a change had been beneficial, it would have been brought about by the struggle for survival, must be rejected as invalid.

されば現在の産業の組織を變更して、産業の下級に在る者（勞働者を云ふ）が、其智能上の能力を用ゐ、之を使用するより快樂を得、又其使用によりて彼等の力を强む可き機會を增す可き樣に改善し得ざるや否やを熱心に研究す可き必要あり。何となれば、斯の如き變化にして利あるものならば、生存競爭の理法に依り既に行はれたる可き筈なりとの論は不妥當なればなり

と。是れ軈て以下數章に於ける氏が所論の眼目とする所と云ふ可し。第九章は即ち分業及び機械論にして予が前章に示したる諸問題を詳論す。第十章は之に續て、『特殊工業の特殊地方に於ける集中』即ち地方的分業論なり。第十一章は『大仕掛の生産』を論じ、大經營の企業に於ける利害得失を詳論す。而して第十二章に至り『營業の經營』

と題し、最も狹義に於ける企業論を試み、終に第十三章は以上諸章の要旨を更らに重言して結論と爲し、企業に於ける收穫遞減收穫遞增の兩法則の作用に就て數言を費やして、茲に筆を第四編供給論生産働因論に擱く。

以上六章に渉るマ氏の所論は、他の部分の所論と大に趣を異にし、先づ根柢を生物學に求め、此上に建設するに多く英國現時の産業組織の實際に基きたる事實的解剖の詳說を以てす。然れども之を供給論の中心として見るときは、氏の結構は、前後透徹せざるものと云はざるを得ず。氏の所論の內容より云へば、寧ろ近頃シュモラーの試みたる如く、國民經濟の機關としての企業論とす可きものにして、マ氏が新舊兩派の分水嶺に立つこと、其企業論に於て最も明白に看取するを得るなり。而して氏が企業論の內容豐富にして、克く近時斯學の要求する現實的研究の旨を得たるは、偶々氏が此點に於て所謂歷史的研究法に接近し來れる好證左と云ふ可きなり。

マ氏企業論の性質右の如し。されば予が本書に於て終始執り來れる評論的叙述に適せず。却つて第五・六編に於て、予が將さに執らんとする解剖的說明を要す。以下流通論に於て更らに其業を繼續せんとす。

第八章　補　論

後段再論す可きにより、今は補論を加へず。

14. VIII. 24.

F. I, 45.